

の後廢校となり、明治五年學制頒布に際し、小學校を開設して憲章館と稱せり。

學科は和漢學、算術、筆道とし、教科書は漢學には孝經、四書、五經、左傳、文章軌範、綱鑑易知錄の類を、和學には古事記、國史略、六國史、大日本史、古今和歌集、令義解の類を用ふ。職員には學校奉行、學監、教授あり。生徒約二百名、藩儒の名あるもの、前に吉田東堂及長戸得齋あり、後に三宅樞臺あり。以下藩儒並に藩學功勞者につきて記載すべし。

吉田東堂

吉田東堂、名は弘文、字は公彝、通稱東一郎、東堂は其の號、加納藩主永井侯の臣なり。父、名は弘藏、通稱宅之丞、加納の菅公祠官宮邊弘俊の季子にして、年十三、吉田道孝に養はれて嗣となり、上士の列に登り、天保八年歿す。壽七十二、二男あり、長は即ち東堂にして、次は益文なり。東堂少にして學を好み、長じて、文化末年か又は文政初年なるべし。江戸に遊學す。時に三宅樞園(名は守常、字は廣業)別を送つて賦して曰く、

送三吉田公彝赴三江戸
縣城、城、月、照、三、清、霜、
不、耐、橋、頭、折、三、柳、楊、
連、榻、琴、檜、夢、一、場、
駐、馬、旗、亭、聊、喚、酒、
去、矣、雄、都、道、路、近、
待、君、衣、錦、照、三、家、鄉、
題、詩、祖、席、更、沾、雲、
各、天、鴻、雁、書、千、里、

江戸に抵り、佐藤一齋(?)の門に入り、刻苦勉勵す。然も資力續かず。時に平川天神に於て賣講をなせし事あり。又廣く當世の士と交り、殊に卷菱湖とは親交あり。學成りて郷に歸る。藩主永井侯の憲章館を興すや、擧げられて教授となり、子弟を薰陶す。東堂もと陽明學を奉じ、最も憂國の念深し。曾て渡邊華山と交を訂び、後又佐久間象山と往復して、

砲術を研究し、屢々加納城外に於て大砲を試演せりと云ふ。後致仕して家を長子文實(名は太郎)に譲り、名古屋に出で、私塾を開きて徒に授く。門に入るもの多し。志士松本奎堂及び書家大竹蔭塘の如き其の門より出づと云ふ。安政中病みて歿す。(享年未詳)著論語字蒙五十卷(十五行百枚許にて各一卷を成せりと云ふ、今其の所在を知らず、惜むべし)あり。配小池氏、名は斐瑳子、小池忠明の妻、文實、文禮、文彬の三男を生み、天保十二年歿す。文禮、文彬夭折す。後配某氏、文行を生む。文行名は小金吾、維新の頃藩學の教授となり、加納藩參事に任せられき。(信淨寺内吉田家墓碑、三野人物考、及故新貝重時翁の談に據る)當時加納には宮田嘯臺(第二章創始期、當時の詞家の條參照)八秩の高齡を以て文壇の柄を秉り、森梅溪(名は永嗣、字は繼業、通稱孫作、森東門の子、天保五年歿す。年六十五)三宅樞園(名は守常、一に德、字は廣業、通稱熊助、後左兵衛と改む三宅牛洞の長子)同東臯(名は守眞、字は德夫、通稱與三郎、樞園の弟、文久二年歿す)佐藤東山(名は温、字は如玉、通稱新助)宮邊義竹園(名は記治、字は正卿、通稱芝齋)等多士濟々、岐阜の野田白石園、堀田華陽(後出)等と詩社を設け、月次相會して詩酒唱酬せり。左に其の作數首を示すべし。

稻葉山觀花
白櫻春滿好徘徊。
晚歸不奈花間月。
彩雲纏繞籠三樹。
月影送來花不來。
香雲飄飄埋石苔。
初地梵樓幽磬響。
梅雨新晴
雨後園林翠自圓。
梅熟荷肥堪酌酒。
書牖逢晴看細字。
釣竿何用向漁磯。
三宅樞園
三宅東臯

雲屏突奕樹森森。
昔日干戈爭鬪心。

荒磴蕭然風氣深。
浮世變遷都似箇。

巖下尋墳看駭鹿。
空山只有老松音。

溪邊坐石聽鳴禽。

而今詩酒昇平興。

水破滿池聲

漸有堅冰泮。

忽看細浪生。

風吹銀母散。

日照水精明。

庭陰春始暖。
知是滄魚上。

池面映新晴。
稜層破碎聲。

漸有堅冰泮。

忽看細浪生。

風吹銀母散。

日照水精明。

十六夜月

星斗闌干灑氣生。
滿巖樹影畫圖明。

更憐月色得新晴。
不妨二八水輪減。

雲烟空負中秋賞。
風拂桂香吟骨清。

詩酒不違今夜盟。

後苑蛩聲樹杪冷。

詩酒會春風

園林風澹蕩。
吟後乘三醉。

春社雨新晴。
出門且散行。

此會三烟霞友。

共尋三詩酒盟。

柳汀魚作隊。

花塢鳥群鳴。

宮部義竹園

長戶得齋

當時加納より出で、名を世に知られたるものに長戸得齋あり。立志傳中の人として推稱すべし。長戸得齋、名は讓、字は士讓、寛司と稱す。加納藩の人、生れて七歳父を喪ひ、一姉と共に母に養育せらる。十六歳にして亦母を哭す。時に姉既に嫁して家に在らず。孤影子立、やがて仕籍に登り吏となる。一日慨然として曰く、「志有るの士、何ぞ此の簿書を事とせん。」と。乃ち固く請ひて仕を辭し、負笈師を求めて、京攝勢尾の間に遊び、後江戸に出で、佐藤一齋の門に入り、留まること數年、經史を研鑽し、詩文を講究す。

文政十二年夏季郷に歸り、先塋に展し、勢尾の諸友を訪ひ、還りて岐阜に至り、姉夫安藤正修の百曲園に寓し、滯留月餘、又重ねて江戸に赴く。梁川星巖時に一律を賦して行を餞す。郷を發するに臨み口占して曰く、

將發郷口占二首

掃展先塋住數旬。

韶姿散盡帶三編。

十年未遂平生志。

獨踏乾坤一委身。

東奔西走幾冬春。

久慣浮萍斷梗身。

負郭無田歸亦客。

不妨重作遠遊人。

(得齋詩文鈔)

上有知に村瀬藤城を訪ひ、飛州の山川を跋涉し、加州二越より、奥州を経て江戸に入る。此の行北道遊簿二卷(天保十年上木、林樞宇、川田藻海の序、佐藤一齋の跋あり)を著し、以て遊迹の勝概を紀す。同書巻頭に曰く、

文政己丑季夏。余歸三舊里。掃展先塋。訪勢尾間諸友。還至岐阜。寓姉夫安藤正修之百曲園一朔月矣。將取路北陸。以後赴江都。會北勢原迪齋託其子玉蟠一遊學焉。於是鞋履千里。得三蕭然。乃記其行程。以供他日風遊云々。

ど。是なり。江都に入りて再び一齋の門に入り、因てまた林述齋の門に登り、百之寮に入り、同窓河田藻海等と相共に切劇す。當時交遊する所、述齋の子樞宇、藕濱を初め、安積良齋、大槻盤溪等皆一時の名士なり。既にして又江都を發して東奥の行あり。利根川を下り、鹿島香取兩宮に賽し、水戸を経て松島金華山の勝を探り、日光廟に詣で、歸る。此の行また遊奥志二卷の著あり。やがて業成りて帷を築地街に下し、徒に授く。門に入るもの多し。既にして加納侯命あり。乃ち再び仕へて儒官となり、世子の講筵に侍す。又徴されて高槻侯世子及び篠山侯璋峰公子の侍講となる。名益顯れ、策を挾み教を請ふもの常に門に滿つと云ふ。

天保九年戊戌秋郷に歸り、先塋に展す。還郷の作一篇あり。其の閱歷を知るに足るを以て左に之を録すべし。

不肖甫七歲。	先子歸道山。	狎愛覓梨栗。	彷彿記音韻。	同胞唯有姊。
共依阿母前。	家資既盡盡。	電下欲無煙。	阿母萬勞劬。	鞠養極憂煎。
夜績煩織手。	二兒蒙保全。	姊長爲擇配。	早嫁得良緣。	誓我無所夕。
一意執簡編。	我亦知所嚮。	慈訓銘心堅。	自期成立後。	反哺盡甘藪。
老齡不可恃。	落日過虞淵。	我年方十六。	棄我赴重泉。	嗟我若爲者。
顯影獨凄然。	親戚多反目。	孤子誰復憐。	激發四方志。	負笈賦時賢。
箕裘付一擲。	萍蹤處處還。	爾來十餘歲。	所執業則專。	不材雖不就。
師友共周旋。	再仕桑梓國。	况獲充儒員。	自料何所得。	叨居諸臣先。
不有餘慶在。	殆爲二人所捐。	欲以報之德。	問極是蒼天。	戊戌歲秋日。
告假向鄉還。	還鄉姊已歿。	誰與說當年。	獨來雙墓下。	拜跪淚漣漣。
筠筒盛薪水。	插得秋花鮮。	薄奠從邦俗。	觴酒借僧筵。	所冀格先魄。
孝思達微涓。	秋色方憺澹。	葉響西風懸。	賦詩披情懷。	自擬藝我篇。

三宅樞園、同東阜、佐藤東山等邀飲款待至らざる無し。やがて又江戸に還れり。

弘化二年また先塋に歸展し、夫より西して湖上の風光を探り、京に入りて梅辻春樵、貫名海屋、牧齋、池内陶所等と交遊し、更に丹後の天、橋立の勝を賞し、浪華に入りて、篠崎小竹、後藤松陰等を訪ひ遊歴八旬にして家に歸る。後數年また二毛の游あり。凡そ幽邃遐僻の境、怪奇絶特の觀、悉く探討せざるなし。蘊蓄已に久しく、發して文詩となる。風月窈窕、霜露凄愴、憂樂愉戚、洋々滔々として楮墨の

間に溢るゝもの、亦怪むに足らざるなり。

得齋詩文極めて富む。嘉永五年詩二卷(四百首)、文一卷(三十六篇)を鈔出して上梓し、名づけて得齋詩文鈔と云ふ。林蕙濱の序に曰く

其文暢達而和平。其詩閑雅而流麗。

梅辻春樵の跋語に曰く

予嘗讀三翁(一齋)之詩文。而今士讓之文鈔。頗覺予與三翁之體裁一髮髣相近。其弟子而肖三類其師。固所不怪。惟高古老熟之妙在二其師。而雅健流暢之美在三其弟子。至下各有三典實。不失倫理。一則一而二。二而一。予不復能上定三其妍媸一也。

と、其の推賞を被れること斯の如し。

歿年未詳、長男謙、家を嗣ぐ。謙また才學あり。未だ弱冠に及ばずして、學術制行殆ど成人の如くなりしと云ふ。(得齋詩文集、北道遊蹤)

片岡成齋

片岡成齋、名は貞興、幼名旗之助、長じて左富と更め、又伊左衛門と改め、後又左富に復す。成齋は其號、七世の祖定則、濱松の人、始めて永井侯に仕へ家老となり、秩三百石を賜ふ。祖定之、父定周、世々准家老となり、二百十石を賜ふ。定周竹中教重の女を娶り、成齋を生む。

成齋文化三年を以て生る。八歳にして父を喪ふ。十三歳始めて正政侯に仕へ、百九十石を賜ふ。扈從して江戸に到り、遂に従つて處る。累進して物頭兼側用人となり、命を受けて嗣子を匡導し、幾と寢食を廢するに至る。後嗣子立つ。之を尙典候となす。又命せられて嗣子を輔け、家老に擢でらる。嗣子尙服候立つや、侯を翼け入りて錫命の恩を謝す。人以て榮となせり。

慶應四年正月、東軍伏見を犯し大敗して去る。二月王師大垣に至る。閩藩驚惶、成齋走つて歸順を請ふ。許されず。此の時に當り徳川氏近畿諸藩の其の封土を失はんことを慮り、命じて國に就き歸順せしむ。而して侯猶東邸に在り。成齋乃ち獨り身を以て責に任じ、子江南と謀りて侯の西歸を促し、病を興して東西に奔走し、衣帯を解かざるもの累月。侯國に歸りて譴責を免れ、事始めて解くを得たり。乃ち大に喜んで曰く「吾事了れり矣」と、即ち老を乞ふ。優答聽されず。前後秩を増し三十石を賜ふ。皆固辭して受けず。益老を乞ふ。明年春家老を免じ、加納藩總教に除し、執政に同じうす。又刀及び金を賜ひ、更に藤堂侯贈る所の資治通鑑を賜ふ。幾も無く疾を得、詩を作つて曰く。

吾臨大命又何求。

脫得妖氣一心始休。

自是類謀忠死鬼。

掃三攝廢一淨三神州。

病を力めて手書す。後二日終に起たず。時に明治二年七月十八日、享年六十有四。諡して謹愨と曰ひ、城西信淨寺に葬る。著す所六諭衍義新鈔二卷及詩歌若干卷あり。

成齋人と爲り高類銳首、温にして威あり。人に接して虚心欵曲、循々として斷無き者の如し。然れ共變に處しては侃々諤々屈撓する所無し。初め王師の未だ東せざるや、詐りて官軍赤報隊と號する者あり。江より濃に入り、岩手を取り進んで加納城下に至る。成齋一屬官を率ゐて軍門に到り、隊長に面して勤王を請ふ。隊長勵聲一番曰く「城を納れ信を表せよ。然らずんば砲礮あるのみ」と。成齋徐に對へて曰く「普天の下誰か敢て王師に抗せん。唯々城は命を受けて之を守る。輒く納るべからず。願くば主裁を東邸に得ん。若し允されずんば臣等列坐砲的とならん耳」と。隊長其の志節に感じ、復た城を納るゝを請はず。兵器若干を請ひて去る。其勇斷概ね此類なり。蓋し維新の際一藩事無きを得たるもの實に成齋

の力にして、其の功大垣藩の小原鐵心に譲らずと謂ふべし。

成齋初め大垣藩脇水忠禔の女を娶り一女を生む。後幕士長岡壽考の女を娶り、一男三女を擧ぐ。男は則ち江南なり。(三宅權齋撰、信淨寺内幕表)

片岡江南

片岡江南、名は靜、字は子得、旗之助と稱す。江南は其の號、天保九年五月朔江戸藩邸に生る。幼にして嬉戲を喜ばず。常に故老より舊事を聞きて以て樂となす。嘉永六年尙服侯の侍臣となり、安政三年父に従つて加納に徙る。既にして再び江戸に遊び、兵法を學ぶ。幕末に際し海内騷然、江南父と東西協議し、屢往來以て藩主を助く。「三十六回攀函嶺」の句あり、以て其の執筆を見るべし。維新の際閩藩事無きを得たるもの江南父子の力なり。

明治元年貢士となり、二年加納藩權大參事に任じ、大に藩政を釐革し、職制を定め、人材を用ひ、士の常職を解きて其秩祿を中にする。是に於て物論沸騰、軀殆ど危し。然れ共少しも顧みず。盛に學校を興し、生徒を遣して東京に留學せしむ。既にして藩廢せられて縣となる。因て職を大藏省に奉じて福岡縣を巡り、後司法内務二省に歴仕して沖繩縣に赴く。又名古屋治安裁判所長と爲り、尋いで職を山口縣に奉じ、病に罹りて辭職し、加納に歸養す。知事小崎利準、深く其の才幹を知り、將に郡長に任せんとす。病を以て之を辭す。十九年四月十二日終に起たず。享年四十九。信淨寺先塋の次に葬る。諡して清烈江南先生と曰ふ。

江南驅幹豊肥、眼光人を射る。性忠孝淳篤、卓識果斷あり、亦頗る勤王の念に富む。其の大參事となるや、首として毀城の議を建て、また三川治水の要を論ず。其の卓識率ね此類なり。而して性狷介、遂

に大に其の材方を伸ぶる能はず、惜むべし。江南武技に於て究めざる無く、讀書亦よく大義に通じ、殊に國史に達し。時に詩文俳歌を屬す、逸宕誦すべし。配川上氏幽閑貞靜、頗る内助の功あり。三男を擧ぐ。長旗郎嗣げり。(南原綱紀撰、片岡江南碑銘)

三宅樵臺

三宅樵臺、名は守觀、字は海岳、復輔と稱し、後左平と改む、樵臺は其の號、本姓は小坂氏、武儀郡上有知村小坂宗十郎(名は實信、北藩と號す。嘉永五年歿す。年七十七。詩文集若干卷あり)の第三子なり。文化十三年を以て生る。安政二年六月、年三十九、三宅樵園(左兵衛、守常)の家に入螟し、因て其の氏を冒す。三宅氏は加納の舊族たり。九世の祖、孫六郎家重、厚見郡沓井に住す。慶長の初め徳川家康、家重の言を用ひ、城を沓井に築き加納と改稱す。三宅氏の居適々其の地に當る。乃ち市街に徙住す。由て地子及び助役を免れ、子孫蟬聯其の地を占むと云ふ。養父樵園、其の父牛洞、並に文學ありしこと既に記せる所なり。

樵臺幼にして學を好み、村瀬藤城に從つて業を受く。天保十年東遊し、幕府の儒員佐藤一齋に贊を執り、後また津藩の文學齋藤拙堂及び宮原節庵に師事し、郷に歸りて私塾春曠塾を開き徒に授く。安政二年三宅氏を嗣ぐや、授業生徒を携へ來りて教授す。明治の初め加納藩に出仕し、文學教授となる。藩主永井侯屢々召して國事を諮詢す。六年十月遷喬義校教授となる。七年職を辭す。八年官に請うて樵臺私塾を開き、帷を下して教授す。遠近子弟來り學ぶ者多し。其の人を誨ふる諄々倦まず、其の講說訓話に泥まず、大義を指授し、人をして思うて自得せしむ。

樵臺人と爲り朴實寡言、澹然世に求むる所なし。飲食衣服の如き、家人の供する所に一任す。或は珍膳案に盈つるも、食ふ所一菜一羹に過ぎず。家居無事、一室に兀坐し、潛心耽讀、客の傍に在るあるも曾て之を知らず。久しうして始めて之を覺り、驚起禮を作し、談笑歡を盡す。祁寒暑雨と雖、終日徹宵研精休まず。嘗て冬夜書を讀む。霜氣膚に透り、擁する所の手爐火燼するも之を覺らず。厨婢起て井を汲むを聞き、始めて天明を知る。此の如きもの屢々なり。其刻苦知るべし。平居書を讀むや、讀むに隨つて抄す。手抄する所數十帙、大日本史、日本外史等皆親ら騰寫する所たり。明治二十九年七月七日病歿す。享年八十一。加納欣淨寺に葬る。配三宅氏、四男四女を擧ぐ。長太郎吉、家を繼ぐ。

樵臺學經史に淵源し、博く百家に涉り、又刑律を研覈し、餘暇詩賦を好み、最も古詩に長す。其の詩胸臆を直抒し、虚飾を事とせず、咀嚼味あり、篇々皆樵臺其の人の如し。晚年貝葉を繙き、頗る得る所あり。又好んで山水の遊をなし、花晨月夕、門人四五輩を携へ、徜徉行遊以て樂となす。著す所山陽詩抄集解。樵臺詩鈔(大野憲三編、明治二十二年上梓、野村藤陰の序、森桂園の後序あり)あり。丸尾錦村、森桂園等其の門に出づ。左に其の詩二三を示すべし。

細香女史來訪。而藤城翁不在。因留之遊三梅莊。以待三翁歸。

門首不願三凡鳥。廻上。

林夫子去返何遲。

繪洲金龜山

靈峰縹緲海天浮。

仙者羽人如可求。

題三小學校壁。二首錄一

子弟雖雜萬物靈。

百歲樓前鶯語時。

會近此人一得展眉。

小孤山上梅開日。

吾將結三屋此山頭。

跨水斷崖開石室。

插空翠嶺起珠樓。

先生一視無差別。

敦自三牛聲。一至三馬聲。

明治十四年十二月。故主永井公調、先塋於菟路及加納、以三加納爲三齋封、留十餘日。拜謁之餘獻以三絕句。

君臣一別十經秋。

重拜三溫顏、淚忽流。

請看當時故宮殿。

牛爲三夢龍、半林丘。

(錄一)

(加納城址三宅權齋翁碑銘及權齋詩鈔)

岐 阜

2. 岐 阜

岐阜はもと尾州藩の所轄にして、前期既に山田鼎石を初め、同芝岡、左合龍山、堀田石室、野田鳳川等の出づるあり。此の期に及びて野田良阿、同白石園、堀田華陽、小野石芝等を出し、文學隆盛を極めたりしが、未だ定りたる學制無く、子弟は唯私塾寺小屋にて修學するのみなりき。

野田良阿、名は良阿、鳳川の弟、明和五年を以て生れ、天保五年を以て歿す。年六十七、謚して大圓自休居士と曰ふ。墓は小熊町圓龍寺に在り。

野田白石、名は元堅、字は季好、通稱文之右衛門(また文柄と稱す)號は新甫、一に白石園と號す。鳳川の弟、明和八年を以て生れ、天保五年を以て終る。年六十四。墓は良阿と同所に在り。

堀田華陽、姓は紀氏、名は迪、字は世允、石室の子、文政九年丙戌春、吟社同人の詩を編輯す。聖代春唱一卷(宮田嘯齋序、野田白石園跋あり)是なり。

小野石芝、名は邦教、字は玄豹、號は石芝、一に青松堂と號す、通稱周輔、御園の人、儒及び醫を業とし、傍ら吉良流の禮法を以て聞ゆ。天性至孝、能く母に仕ふ。加納侯より苗字帶刀を許されたり。

此の他、前田梅園(名は照、字は公純、通稱豊次、又七兵衛と稱す)豊田華岳(名は嘉言、字は伯亨、通稱龍右衛門)武山赤壁(名は恒徳、字は之固、巖と稱す)等あり。加納の諸士と共に詩社を設け、相會して詩文を研鑽せり。左に其の作

數首を示すべし。

余豊二伯兄公淵、柁田道要有、詩見慰、賦答。

瀟湘夜色雨凄凄。

鴻雁失群湖上迷。

非三是四朋相慰切。

兼葭深處奈孤樓。

野 田 白 石

寶閣桃李媚。

關漫掃三春烟。

蝶舞和風外。

鶯嬌麗日天。

香灑侵三佛坐。

陰曠引三僧眠。

堀 田 華 陽

禁酒苦碑在。

不教三醉客頰。

獨坐一園春。

雪盡思三山遠。

水消覺三水竭。

花如迎三客過。

小 野 石 芝

一園春色暖。

獨坐拂三風烟。

把酒杯非三避賢。

翠簾影動清風起。

吹送荷花馥郁香。

柳似伴三吾眠。

前 田 梅 園

地僻人稀夏日長。

雨過綠水漲三池塘。

翠簾影動清風起。

吹送荷花馥郁香。

三野風雅、三野人物考、聖代春唱)

林 犀 江

慶應の末、始めて尾州藩より此の地に學舎を設け、名づけて教倫館と云ひ、士族卒及び平民の子弟をも入學せしめ、和漢の學科、生徒の求に應じて教授す。生徒の數百五十名に及びると云ふ。教授にして名あるを林犀江とす。明治初年學制頒布の際廢校となりて小學校を創立するに至れり。

林犀江、名は桂、字は三益、犀江は其の號、字を以て多く行はる。本巢郡十八餘村の人、父名は俊徳、天保二年を以て犀江を生む。安政年間犀江岐阜に出で、笹土居町に寓し、儒學を以て自ら任じ、私塾を開きて徒に授け、傍ら醫を以て業とす。維新の初教倫館の教授に任ず。生徒日に進む。教倫館廢せらるゝに及び、喟然として嘆じ

て曰く「夫の人の子を如何せん。」と、乃ち帷を下して徒に授く。咕嘩の聲啼々として又起り、教育の功鬱然觀るべきものあり。既にして、父俊徳の訃至る。號哭して喪に奔り、哀毀幾んど性を滅す。服除く。門人交々請ひて再び岐阜に延く。未だ幾ならずして疾作る。遂に明治十七年五月廿六日を以て歿す。享年五十四。其郷先塋の次に歸葬す。子訥堂(保一即前浪飛日報主筆)嗣ぐ。

犀江博く經史百家に通じ、特に左傳に精し。又能く詩を賦し文を屬す。岐阜の舊俗餘食して衺衣、晏逸にして遊惰、人の書を読むを視ては聚り指して之を笑ふ。後風俗一變、庠序大に興り、文物の盛多く愧づる所無きもの、犀江實に之が唱首たり。犀江歿するの後五年、門生胥議り碑を建て、銘を勒す。小崎知事聞きて之を嘉し、爲に額字を書し、金若干を贈る。碑は鑄銅圓壘形、周圍約五尺、高さ約一丈、今現に岐阜神道中教院境内に在り。
(墓碑銘、日本教育實史料、故加島七舟翁談)

雷

聞

將有

昔公廟

此の他尾州領には、園城寺(羽島郡)に藩立學校あり。名を沈江閣と云ひ、尾州藩儒細野要齋(名は忠、陳字は子高、通稱爲藏、又仙之右衛門、明治元年明倫堂教授に任じ、侍講侍讀を兼ね、尋て督學の事を行ふ。明治十一年十二月歿す。享年六十八。尾張名家誌の著あり。屢々來往をして學事を視たりと云ふ。然れども未だ其の詳細を知らず。

八、苗木、高富、野村諸藩の文教

1. 苗木藩

苗木藩には從來藩立の學校なし。随つて文教を専務とするもの無く、藩士の文學ある者を撰び、之を藩主始め子弟の師範とせるのみ。弘化の頃より、藩主遠山友祿(天保十一年襲封)、漢學者矢野立藏(江月)、金子霜山(養藩儒等)を江戸邸に聘し、毎月數度經書を講せしむ。明治元年に到り、藩主初め藩中有志者の盡力により、初めて制度を更め、學校を創立して、子弟をして必ず藩校に入學せしむ。此の事業を總括せる者は藩士曾我祐申なり。明治三年閏十月學校を藩廳と合併し、尋て廢藩に及び、全く廢校となりしが、明治五年後、苗木小學校となり。

學校は日新館と稱し、初めは四書五經より和漢の歴史を授けしが、中途にして之を止め、國學を専らとし、本居、平田諸學者の著書を講せしめ、漢學は有志者のみ之を學ぶ。校内に菅原道具を初め、八意思兼大神、忌部大神及び、荷田、加茂、本居、平田の四大人を祀り、年々祭事を行ひ、以て釋奠の儀に代へたり。是れ此の藩校の特色とす。生徒は文武を兼修すべき定にして、試験の節には藩主の臨校あり。生徒凡そ百五十人に上りきといふ。(日本教育實史料)

曾我祐申、通稱多賀八、勉齋と號す。元と苗木藩士岡本氏の三男にして、出で、曾我氏の嗣となり、因て其の氏を冒せり。文政八年十二月を以て、惠那郡日比野村に生る。弘化二年十月始めて藩主遠山侯に仕へ、江戸芝將監橋藩邸に在り。職を奉ずるの餘暇、安藝藩儒官金子霜山(名は清氏、通稱鐵之助、一に地處と號す、父子三世藝藩儒官たり。慶應元年歿す、年七十七)の門に遊び、専ら程朱の學を修め、又平田篤胤に從學し、博く皇學に通ず。藩主擢て、監察と爲し、尋いて會計主務に轉ず。明治元年維新の際、俄に藩地に歸る。曾々學校創立の舉あり。藩主命じて其事を幹せしむ。祐申日夜拮据督勵、一年を出でずして功成る。明

治二年學校、教頭と爲り、又進んで苗木藩少參事に任ず。此の時、朝廷各藩をして宣教使を置かしむ。祐申宣教使の任を受け、將に任に東京に赴かんとす。適々病に罹るを以て終に致仕す。後數年病少しく瘵ゆ。仍て居を福岡村に移し、子弟を薰陶す。明治十四年病再び發し、五月十九日歿す。享年五十五歳六月なり。

祐申性謹嚴温厚、其の人に接するや、和煦、諄々教へて倦まず。而して劍槍の技及び馬術兵法亦其の奥を究めざるなし。明治二十三年四月、門人及び舊友等相圖り、一碑を建設し、略々其の行狀を掲げ、以て不朽に傳ふ。碑は現に苗木町字日比根平作根に在り。題して「曾我祐申之碑」と云ふ。題字は舊藩主從四位遠山友祿の筆、文は神谷簡齋の撰に係る。(碑文に據る)

高富藩

2. 高富藩

高富藩は在府の一小藩にして、もと藩立の學校無く、子弟は藩士中學識あるもの、又は他の學者に就きて任意に修學するのみなりしが、弘化年中藩主本庄安藝守道貫、世子近江守道美と謀り、始めて學校を舊江戸西丸下の藩邸に設立し、名を教倫學校と云ひ、嘉永の末、麻布市兵衛町藩邸内に移し、藩士を奨励して悉く就學せしめたり。然れども衰爾たる小藩にして、人員僅少なるに因り、藩士政務の餘暇を以て修學するに過ぎず。年少子弟も武技を兼修するが故に、専ら文學に従事する能はず。従つて藩校に關係ある著名のもの無し。

學科は四書五經及び歴史詩文書を専とし、皇學及び洋學は各自の意向に任せ、他の在府家塾に通學せしめたり。維新の初め、園藩、領地山縣郡高富村に移轉するや、學校もまた同地に移轉し、他の農商家の子

弟と雖も入學を請ふものあれば之を許可せり。生徒の數は年により増減ありと雖も、大抵五六十名に過ぎざりき。廢藩に及び學校亦廢止せられたり。(日本教育史資料)

桑原鷲峰

高富藩校とは關係なければ、當時高富附近より出でたる儒者に桑原鷲峰あり。便宜茲に附記すべし。桑原鷲峰、名は枕、初め名は啓、通稱元吉郎、鷲峰は其の號、一に陸仙と號す。山縣郡粟野村(今岩野田村に屬す)の産なり。幼時其の父命じて醫を學ばしむ。鷲峰之を屑とせず。文學を講究し以て大に成すあらんとす。年十餘歲、出で、京攝地方に遊學し、又江戸に赴き、佐藤一齋の門に遊ぶ。弱冠にして紀州田邊に遊び、城中及び近傍郡村の子弟を集めて教授し、居ること三年餘、再び四方に歴遊し、後帷を京師に下す。公卿諸士教を乞ふ者頗る多し。安政年間田邊領主安藤家の聘に應じ、修道館の教務を掌る。慶應二年病みて歿す。年四十八、其の編著、劉戴山文粹、陳白沙文粹、汪堯峰文粹、孫忠靖公文粹、魏叔子文選要及び詩文集數卷あり。(日本教育史資料)

野村藩

3. 野村藩

文久三年癸亥十一月藩主戸田氏良(安政二)始めて學校を江戸外櫻田の藩邸内に設立し、名づけて濟美館と云ふ。學校設立に盡力せしは、家老柘植唯之進、藩主の本藩より入る傳となりて來る。學事擴張の首唱たり。家老島村衛士及び側役小山小隼太、夙に西洋砲術の利を知り衆に先ちて之を學ぶ等にして、漢學教授に鈴木重遠あり、武術教授に島村勇雄(幕府慶下久保田助太郎に劍術を學ぶ)及び淺羽守雄あり。藩士をして文武諸藝を練習せしむ。明治元年藩主の大垣に移るや、學校を同地へ移して、典學寮と改稱し、後明治三年又之を大野郡大野村(揖斐郡豐木村字野村)に移せり。

學科は漢學、和學、洋學、作文、習字、數學、兵學及び武術、砲術等とし、漢籍は四書、五經、史記、左傳、日本外史、國史略、十八史略、元明史略等を教授せり。生徒八十名に及び、或は藩費を以て他藩に遊學を命ぜらるゝ者あり。維新の頃東京に遊學する者七人に及び、小藩なるに係らず、多く人材を出せり。(日本教育史資料)陸軍中將植村永孚、理學士千本福隆等諸氏の如き何れも藩の貢進生たりし人なり。

鈴木重遠

鈴木重遠、隨安と號す。舊山形藩儒官鹽谷岩陰(名は世弘、字は毅侯、通稱甲藏)の塾に遊び、修學すること五ヶ年、學派は折衷學を主張す。擧げられて藩校漢學教授たり。維新の後、藩校廢止と共に職を罷む。明治十年七月岐阜縣師範學校三等教諭となり、續いて岐阜縣華陽學校教諭たり。十五年九月職を辭し、私塾を開きて徒に授く。著す所、亞米利加輿地誌略。日本史略等あり。(未だ其の生歿の年を知らず。但明治十六年七月横山三川碑文を撰せり。其の下世は同年以後なるや明なり)。

淺羽讓

淺羽讓、名は忠恕、銑三郎と號す、後讓と改む。曾祖忠計、戸田侯に聘せられ、劍道師範となる。祖名は忠厚、父名は忠義、忠義小林氏の女を娶り、二子を生む、長は守雄にして次は讓なり。守雄家を嗣ぎ、島村勇雄に劍術を學び、又馬術砲術に達し、藩の劍術教授たり。文久元年、讓年二十二、藩侯命じて一家を興さしめ、文學擊劍水練の事を司らしむ。明治戊辰の役砲術長と爲り、兄守雄と與に征東の軍に従ひ椿澤に戰ふ。守雄之に死す。讓、奮進猛擊、頻に敵壘に近づく、賊遂に敗れ去る。後郷に旋り、入りて宗家を繼ぐ。明治二年藩政改革の際、擧げられて文學教授と爲る。十五年居を稻富村(今の富秋村字稻富)に移し、温故義塾を創設し、子弟を熏陶す。教を受くるもの數百人、配吉川氏亦裁縫諸藝を教授す。二十五年式内來振神社社司となる。四十一年四月三日病歿す。年六十九。(淺羽讓先生壽碑及び久野正二郎氏の調査せ

られし所に據る)

久々利

4. 久々利

木曾仲泰

美濃國旗本七十餘家のうち、文教の見るべきものあるは可兒郡久々利の千村家なり。就中其の最盛なるを木曾仲泰の代とす。今諸藩文教の稿を終らんとするに臨み、聊か同氏に就きて記すべし。木曾仲泰、舊姓千村氏、名は仲冬、後仲泰と改む、字は大來、一字は埜堂、明陽、退一步、八十一峯道人、三學堂等の號あり。通稱平右衛門、後十郎右衛門と稱し、維新後更に旭翁と改稱す。久々利の領主にして、木曾義仲第二十九世の裔なり。

遠祖義基は義仲の第二子にして、義基六世の孫を讚岐守家村と云ふ。其の第五子下總守家重、興國三年上野國千村郷を領し、因て千村氏を稱す。其の裔平右衛門良重、關原の役東軍に屬し、木曾路を攻畧して功あり。四千六百石を領して久々利に住し、爾來舊幕府表交代寄合となり、一面尾州藩に附屬して、以て維新に及べり。良重九世の孫を平右衛門仲雄と云ふ。夙に本居宣長に私淑し、國學を研究して、特に文章和歌に堪能なり。著す所泳宮考あり。配石河氏(尾藩石河伊賀守光壽の女)文化四年丁卯を以て仲泰を生む。

仲泰幼にして、家臣吉田清暉を侍讀として漢籍を學ぶ。中頃尾藩の儒者澤田眉山(名は正業、字は無功、通稱長藏、傍ら書を善くす)を聘して、漢籍及詩文を講究し、又久々利東禪寺の蓬洲和尚に參禪して佛道の奥義を究めたり。文政十一年戊子十二月廿六日(年二十二)父の退隱により家を承け、爾後銳意家政の整理に努力し、痛く節制を加へて數年にして先世驕奢の瘡痍を癒することを得たり。

斯く家政に就きては節約を敢行せるに拘はらず、大に文武を獎勵し、尾藩より師を聘して家臣子弟を薰陶し、又其の秀俊なるものを選びて、尾藩等へ遊學せしめ、大に人物の養成に努めたり。又人材登庸の路を開き、家格に拘はらず、才能ある者を拔擢して家老とする等、舊例古格に泥まず、斷乎として理想の實現に努めたり。明治二十四年三月十八日病歿す。年八十五。著す所、峒山記勝、西莊集詠及び詩文集若干卷せり。(可兒郡彙報、泳宮風雅等に據る)

後年久々利より神谷簡齋、水谷與嶺等の人物を出せるもの、主として其の文教獎勵の功に歸せざるべからず。

九、角田錦江並に當時の郷先生

由來民俗の肅清、子弟の戒飾、所謂郷先生に俟つ所のもの多し。而して學あるもの、才あるもの、皆祿仕に急に、彈冠して薦を俟つ。また化を郷黨に及ぼし、學を吠畝に傳ふるに意ある者少し。若し夫れ其の人、學に遠く、名利に淡く、鴻鵠となつて高擧せず、鷄鶩と共に安居し、郷黨を感化し、子弟を薰陶し、餘暇文を談じ、詩を説き、江山明媚の間に諷詠す、此の如き者に至りては實に得難し。余美濃文教史を草して、茲に角田錦江を初め郷餘齋、青木東山、横山三川等の數子を得たり。豈傳せずして止むべけんや。

角田錦江、名は炳、字は文虎、春策と稱す。錦江は其の號、笠松の人、父名は道玄、醫を業とし、兼ねて儒術を以て子弟を教授す。享和三年十一月廿八日を以て錦江を生む。錦江人と爲り孝謹質慤、幼に

して善く父母に事ふるを以て聞ゆ。又學を好んで倦まず。年十五、父に代りて講説す。屹として老成人の如し。人之を異とす。十九にして父を喪ひ、母また明を失し、未だ幾もなくして歿す。錦江奉養、哀毀、並に其の禮を盡くす。兄貧にして子多く、家計屢々窮乏を告ぐ。錦江輒ち力を竭して救給す。隣里其の徳を稱せざるは無し。天保年間美濃郡代野田斧吉狀を以て之を幕府に聞す。乃ち白金三枚を賞賜せらる。蓋し異數と謂ふべきなり。

錦江既に德行學問を以て名を遠邇に知らる。天保五年私塾を開き、名づけて喬木塾と云ふ。子弟從遊するもの數百人、安政、元治年間を最も盛なりとなす。邑主成瀬侯(尾州犬山藩主)聘して文學と爲さんと欲す。錦江辭して出でず。侯因て更に毎月一次學館に入りて書を講せんことを請ふ。また辭して遂に罷む。明治中興の時又之を尾州藩に薦むる者あり。また辭して出でず。人に謂ひて曰く、「吾れ身多病、且野人禮節に嫻はず、何を以て仕を爲さん。」と、終身甘んじて吠畝に隠れ、子弟の薰陶を以て已が任とせり。性温厚、長者の風あり。嘗て人に謂つて曰く、「身僻陋に在りて良師を得ず。世謬りて先生と稱す。吾亦謾に之に應ず。諺に所謂「鳥無き里の蝙蝠」のみ。農に非ず、商に非ず、妄に儒名を竊み、飽食暖衣、實に聖世の恩澤なり。」と、其の謙遜概ね此の如し。明治十七年十二月二十九日病を以て歿す。享年八十二。邑の盛泉寺先塋の次に葬る。著す所國史千字文、詠史絶句(明治十三年七月錦江自序あり)及び遺稿若干卷あり。林犀江、青木東山等其門に出づ。配竹中氏三男二女を生む。長節家を嗣ぐ。叔律出で、齋木氏を嗣ぎ、季操出で、加藤氏を嗣ぐ。長女原氏に適き、次女廣間氏に適く。後、門人相謀りて碑を建て、題して「角田錦江先生墓碣銘」と云ひ、依田百川の撰文を刻せり、銘に曰く。

立乎亂離之間者。不_レ免_レ爲_レ行流爲_レ三_レ鄉_レ。節義變爲_レ中_レ客_レ氣_レ。嗟呼先生不_レ際_レ於_レ官_レ。不_レ際_レ於_レ職_レ。晦_レ跡_レ昭_レ名。爲_レ三_レ世_レ所_レ賞。德崇而操貞。令_レ譽_レ不_レ墜。嗟乎後生。何_レ辭_レ乎_レ費。

又以其の人品の高きを知るべし。碑は現に笠松町北、岐阜街道の側に在り。左に其の詞藻の一斑を示すべし。

仲國訪小督二圖

宮、媛、避、レ、告、出、三、風、城、
山、村、潛、レ、身、遠、三、龍、榮、
竹、門、茅、舍、何、人、住、
憶、起、微、臣、侍、二、御、宴、
相、見、悲、歎、雨、無、言、
陛、下、於、レ、親、不、能、レ、庇、
雨、淋、鈴、夜、暗、垂、
使、臣、仲、國、衛、三、王、命、
老、松、風、送、三、瑤、琴、聲、
當、時、琴、曲、記、三、玉、音、
玉、韻、揮、レ、淚、拜、三、君、恩、
只、願、君、王、保、三、龍、體、
使、臣、反、命、足、レ、慰、帝、
四、方、物、色、偏、三、帝、京、
初、如、三、私、語、一、後、驛、雨、
此、聲、無、三、乃、是、宮、媛、
吁、嗟、法、皇、不、免、幽、囚、辱、
莫、問、妾、身、亡、與、存、
太、勝、臨、卹、痴、道、士、
蹤、跡、查、到、山、村、夕、
恰、似、江、州、司、馬、情、
下、馬、徐、步、入、三、竹、門、
相、國、感、談、火、燎、原、
君、不、聞、馬、東、佛、寺、人、已、逝、
徒、傳、長、生、殿、裏、誓、

建 長 寺
禪、林、巨、刹、接、三、蒼、穹、
門、額、篆、文、金、字、空、
創、造、當、時、由、三、相、公、
曾、怒、三、糜、財、一、返、三、僧、侶、
業、鏡、一、種、歸、三、大、道、
輪、他、乃、祖、治、安、功、
法、燈、千、歲、繼、三、宗、風、
殿、龕、佛、像、銅、光、古、

源 義 家
前、九、後、三、歲、月、除、
東、征、萬、里、不、思、家、
春、光、易、暮、人、將、老、
立、三、馬、關、門、一、味、三、落、花、
讀、書、萬、卷、負、三、經、綸、
曲、學、誰、知、却、誤、身、
朱、器、臺、盤、爭、三、得、費、
等、閑、臺、獨、弟、兄、親、
(録、史、絶、句、及、嘉、稿、銘)

郷餘齋、名は實善、通稱元之進、幼名勇太郎、後數馬と改め、晩年隱居して餘齋と稱す。方縣郡御望

村の人、父祖以來地頭松平氏に仕へ、家老職たり。皆漢籍詩文に通せり。祖東岡、名は實元、字は子長、通稱新兵衛、郷南陽の嫡子にして、夙に家庭に學び、後尾藩の岡田新川に従學し、或は平安の山、青霞に字を問ふ。隣郷岐阜の堀田石室、父執たるを以て、毎に就きて研駁す。人と爲り温厚朴實、學古訓を主とし、詩書を能くす、書は趙氏に法り、詩は一に唐に準す。然れども晩年の作は各新意を出せり。齡六十二、初めて致仕し門を杜ちて書を讀み、後進を訓導す。及門の子弟無慮數百人、天保十四年正月三日病みて歿す、享年八十二、詩文集若干卷あり。家に藏すと云ふ。餘齋は其の孫なり。(郷實元墓碑銘)

秋 日 記 感

月、筵、風、砧、涼、氣、清、
坐、來、偏、使、三、老、懷、驚、
斷、腸、經、三、雨、秋、花、瘦、
促、織、當、三、窓、夜、蛩、鳴、
山、中、丘、壑、聽、三、松、聲、
百、年、心、事、空、寥、落、
贏、得、滿、頭、霜、雪、生、
江、上、樓、臺、餘、三、夢、影、
輭、裏、美、人、圖、
碧、紗、帳、掩、三、金、牀、
臉、霞、暈、三、花、遮、三、影、
幾、使、三、情、耶、易、斷、腸、
眉、黛、隨、三、月、泯、三、光、
偷、注、三、橫、波、一、人、欲、三、鬢、

寶、鴨、烟、消、衣、未、央、
碧、紗、帳、掩、三、金、牀、
更、凝、三、玉、膩、一、雪、吹、三、香、
荆、雲、楚、雨、落、三、誰、夢、
機、使、三、情、耶、易、斷、腸、
寒、泉、繞、三、屋、響、消、々、
殘、柳、衰、荷、淡、三、暮、烟、
鴉、外、夕、陽、紅、未、歛、
金、華、秀、色、落、三、吟、邊、
天、人、之、道、素、公、然、
倭、佛、泥、レ、儒、多、是、偏、
要、君、活、眼、明、如、炬、
試、讀、西、州、立、志、編、

岐阜縣令長谷部君借與西國立志編一賦之以謝

七十 自述 二首

蹴鞠是眞頭是仙。
 琴書無恙舊林泉。
 頭齡未抵三衰射。
 晝月朝花氣儘雄。
 白雲堆裏紅塵外。
 不羨神仙不羨佛。
 蘿月松風七十年。
 居然天地一迂翁。

神

祇

いそのかみ、ふるのやしらは、ふりたれど、神はいよく、あらたなりけり
 あまりにも、神の恵の、ひろければ、かしこみまつる、人ぞすくなき
 世はなべて、神のみわざも、しらすしも、われはかばなる、人ぞ多かる

餘齋は單に學問、詩文に秀でたるのみならず、理財、政治の才幹を有し、且慈善の心深く、頗る郷黨の尊信を被れり。又武士道的精神に富み、子弟の教養にも克己、忠誠を説くを第一とせり。門人志を遂げ業を成したるもの尠からず。郷純造男、幼名嘉助、五三居士と號す、大藏次官、貴族院議員を経て、錦鶏間祇候となる。隨意莊雅集餘二卷ありの如き、亦其の門に出づ。明治十四年二月病みて歿す。享年七十三、長子拙齋、家を嗣ぐ。次子高橋倭南、通稱瀨一郎、前岐阜日々新聞社主、第三子郷掃石、字は子壽、通稱佐太郎、並に業を森春濤に受け、詩を好くするを以て知らる。

青木東山

青木東山、名は訥、字は行藏、一字は剛藏、春之助と稱す。厚見郡(現稲葉郡)日置江村の人なり。父柳州、(名は敬慶、字は子徳、孫三郎と稱す。畫を能くし、又詩を嗜む。安政四年七月廿八日歿、年七十五)大里正たり。母は野口氏、東山は其の季子なり。文政九年を以て生る。年甫めて十七、自ら奮つて曰く、「人にして學無くんば、何を以て身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯さん。」と、柳州喜んで曰く、「吾れ學を好むと雖少小家を承け、加ふるに公事に鞅掌して其の素志を達する能はず。是吾が終身の憾なり。汝にして能く

此の如くば則ち吾自ら爲すと何ぞ異ならん、汝其れ旂を勉めよ。」と、東山乃ち角田錦江に従つて學ぶ。又徧く近國諸儒の門を叩き、才學年と俱に長ず。後浪華に遊び、篠崎小竹の門に入り、經義を講究し、又萩原廣道に従つて皇學を受く。二十九歳業成りて郷に歸り、帷を下して生徒に教授す。(日本教育史資料には開塾の歳を弘化二年とせり。同年には東山二十歳なり。二十九歳を是とせば安政元年なり)三十二歳艱に丁り喪に服し、哀毀禮を踰え、肉を御せざるもの一百日。萬延文久の際、領主加納侯屢々旨を諭して任用せんと欲す。東山毎に疾を以て辭す。侯亦敢て強ひず。特に双刀を佩ぶを許し、儒官に準じて以て之を優待す。蓋し異數と謂ふべし。

明治元年十二月教授議員に任ず。五年初廷學制を定め、大に學校を興す。是に於て村民推して統督となす。教務半歲にして職を辭す。東山嘗て詩あり。曰く、

非、洋、非、道、別、開、家。 購、得、多、年、書、五、車。 春、風、唯、願、此、時、節。 欲、育、門、桃、李、花。

乃ち塾舎を號して育桃三餘私塾と云ふ。名聲日に隆、弟子益進む、從遊の士蓋し數百人。後散じて四方に在り、文明の化を贊する者亦尠からず。隣里郷黨其の徳を欽慕し、相語りて先生と稱すれば、問はずして東山たるを知ると云ふ。十五年新に兎裘を營み、六幽書樓と號し、自ら此が記を作る。其の詩文を作るや、甚だ刻苦せずと雖、天才縱横、奇警人の意表に出づ。尤も高青邱、袁隨園の詩を喜ぶ。蓋し其の溫醇と雄傑とを取るなり。其の經を説くや、洛閩を主として、専ら其の說に泥ます。常に曰く、「經學の要は注解の同異得失を辨するに在らず、習うて之に熟するに在り。習うて之に熟すれば、胸中浹治自ら我が用を成す。則ち學問の能事畢れり」と。人と爲り敏達沈毅、精力人に絶す。先輩の著書の未だ上梓

せざる者、及び船載多からざる者、皆手づから謄寫す。子弟の詩文尙も觀るべき者あれば、則ち手寫して之を藏す。其の才を愛し善を好む、蓋し天性なり。平居虚心衆を容れ、絶て文人相輕するの弊無し。家を治むる寛にして法あり、嚴にして恩あり。妻子過あれば一毫假借せず。然れども平時雍熙藹然春の如し。晩に脚疾を患へ、荏苒數年、十七年四月廿七日歿す。享年五十九。諡して剛學院木翁敬訥居士と云ふ。著す所。東山人詩文集若干卷あり。配三浦氏子無し、姪英を養うて嗣となす。越えて二十九年門人相謀り碑を建て之を不朽に傳ふ。碑は現に岐阜篠ヶ谷梅林に在り。題して東山先生青木君碑と云ひ、南摩羽峯の篆額、野村藤陰の撰文を刻せり。(墓碑銘及日本教育史資料)

横山三川

横山三川、名は吉寛、字は千里、通稱市之右衛門、源姓、横山氏、父名は吉行、祖名は吉尹、曾祖名は吉豊、吉豊二十二世の祖を頼信と云ふ。初め佐々木氏なり。元弘中從五位下に叙し、河内守に任じ、近江國横山に居る。因て氏とす。頼信十二世の孫を信鐵といふ。始めて移つて此の國の大野郡黒野村に居る。其の後名古屋藩の下條氏其の地を食む。天明中吉豊之に仕へ、傳へて三川に至ると云ふ。

三川文化六年己巳二月廿二日を以て生る。幼にして學を稻富村兒島百一翁に受け、長じて博く經史に通じ、詩才富贍、又揮毫を善くす。郷黨子弟其の教を受くるもの、日夕門に滿つ。明治三年民籍に入る。七年郷社神官となり、教導職を兼ねぬ。十年九月二日病歿す。享年六十九。村中家塾に葬る。配吉田氏六男二女を生む。四男吉章、彌五郎と稱し、家を嗣ぐ、餘皆夭折す。後配藤井氏一男二女を生む。男を銚呂久(號文淵)と稱す。遺命して銚呂久を以て吉章の嗣となせり。

三川軀幹清癯、天資真率、人に接して謙退、言ふ能はざる者の如し。嘗て曰く、「日月盈虧し、寒暑進

村上杏園

退する者天の道なり。高岸谷を爲し、水流下に就く者地の道なり。以て鬼神の禍福を降し、人情の好惡を爲すに至る迄、皆謙を以て美となして之に與せざる無し。」と、其の易簣に臨み、唐詩を録し子孫を誡めて曰く、「世事從來盈則虧。十分何似八分時。」と、其の謙卑自ら養ふ此の如し。故に其の門に入る者皆卑巽謙退、藹然之に親み、世の輕佻子弟と大に其選を異せり。越えて明治十六年門弟一百餘人相謀り、文を鈴木重遠に請ひ、碑を谷汲山華嚴寺に建つ。現に同寺に存せり。(墓碑銘)

村上杏園、名は主計、杏園と號す、本姓は伊藤氏、近江國神崎郡金堂村に生る。父傳左衛門儒を業とし、道德あり。祖父唯次井伊侯の臣たり。杏園少にして西京に遊び、漢學及び醫術を修む。後美濃國多藝郡(養老郡)橋爪郷に來り、村上喜内の嗣となる。

杏園天資慈仁博愛、家を博濟堂と號し、常に醫を業とし、又傍ら子弟を集めて教授す。醫道繁昌、徳化大に行はる。領主戸田侯其の醫術德行を賞し、賜ふに苗字を以てす。當時藩制平民苗字を冒すを許さず。而して杏園特に此の賜を受く。郷黨以て榮となせり。明治五年十月二十五日歿す。享年六十七。男三人、長讓甫、家を嗣ぐ。次綾五郎夭折す。次照道薙髮して僧となる。女四人皆早世せり。後、明治三十年門人及び有志者相謀り、碑を建て銘を録す。現に橋爪象尾山に在り。(墓碑銘)

渡邊梅邨

渡邊梅邨、名は寛、字は十制、梅邨は其の號、一に中山、又聖溪と號す。源姓、渡邊氏、鼎と稱す。本巢郡文殊の人、醫理に精しく、經術に通じ、兼ねて詩文を能くす。刀圭の傍、子弟を集めて教授す。(未だ生歿の年を詳にせず)

蕭然寒士一竭廬。
世上功名事總虛。

僧石無儲亦委如。
擊三罷唾盡一還自笑。

學匪徒收三尺劍。
平生習氣未能除。

空林留讀五車書。

貧時交際情多薄。

和三細香女史春晴一 (十首之一)

春郊雨霽日烘泥。

芳草青青十里堤。

一陣光風烟乍散。

杏花邨在柳橋西。

(三野風雅、三野人物考)

同時に高橋杏村あり。杏村は書を以て本色となすもの、此を以て郷先生の列に加ふるは聊か不倫の嫌あれども、便宜此に附載すべし。

高橋杏村

高橋杏村、名は九鴻、字は景羽、杏村は其の號、又爪雪、塵遠草堂の別號あり。通稱友吉、後、總右衛門と稱す。安八郡神戸の人、書を中林竹洞に學び、特に山水に巧なり。又梁川星巖、神田柳溪等と交り、詩を能くす。弘化元年其の郷に私塾を開き、名づけて鐵鼎學舎と云ひ、漢學及び書學を教授す。安政の頃を最盛とし、門人輻湊す。曾て遊歴して三河に至る。故に三河地方にも門人少からず。明治元年五月四日歿す。年六十四、諡して良堂と云ふ。(日本教育史資料、三野人物考)

最後に、幕末當時、身を尊攘志士の間に入れて、慷慨義に赴ける、隠れたる勤王家三上藤川を傳すべし。

三上藤川

三上藤川、名は默、字は士成、通稱主水、本姓不破、藤川は其の號なり。不破郡關原村真宗大谷派遍照山圓龍寺觀堂師の子にして、文政七年二月二十二日を以て生る。効名智賀丸、後還俗して不破忠藏と稱せり。

藤川幼より學を好み、岩手の神田柳溪に就きて學ぶ。柳溪易簣の後奮然東遊、昌平巖に入り、學頭安

積、良齋の見山樓に寓して、教を受くること數年、廣く天下知名の士と交り、殊に高山正之を敬慕せり。學成りて仕を諸侯に求めず。海内を周遊して、或は孝子節婦を訪ひ、或は王事慷慨の士を覓め、或は佐渡に航して順德帝及日野資朝の遺蹟を弔ふなど、數年漂遊に日を費し、嘉永の初、家郷に歸る。偶々人の介するあり。出でて近江國淺井郡大路邑の醫三上家の贅婿となり、業を襲ぎて刀圭を執り、名を主水と稱せり。

當時湖東には大岡松堂、堤篁亭、山根半溪、大音龍僧等の文士ありて、何れも藤川の學說論議に敬服し、競つて之と交れり。偶々米艦浦賀に來りて互市を求むるや、海内騷然、藤川等頗る尊攘を痛論し、湖東の文士を雅會に託して會合し、或は舊友梅田雲濱、梁川星巖、賴三樹、板倉槐堂、小野湖山等と竊に氣脈を通じて時事を議し、隱然湖東の重鎮たりき。

當時其の郷關原に於ても、弟禎次郎同じく藤川の意を承けて、尊王攘夷を痛論し、慷慨里人を驚かせり。是れ今尙里老の傳誦する所なり。兄藤川は殊に文に精しく、弟禎次郎は詩に巧なりしと云ふ。

文久の初、藤川故郷に歸り、祖家傳來の名刀を取出し、「嗚呼何ぞ鐔の粗なる」と歎じ、大垣に赴きて名鐔を得て歸り、「噫、我本懷を達する近きに在り。」と、捨臺詞を残して去る。是れ即ち藤川が家郷に對する最後の離別なりき。文久三年二月舊友高橋有慶が京阪の狀況を報せし書に曰く、

(上略) 扱當時の形勢如何なり行候哉、然て一向穩ならざる事に候。さかく此頃公武御合體之由候。左候者、何れ年内中には御討拂と被、察候。若御上洛の上御合體なき時は、何れ内亂と被、存候。只々御合體にて御討拂の事所、祈候。定而御高論も候は入。些と承り度事に候。近來は梅翁(雲濱)、賴(三樹)、吉田(松陰)等の書格別に相成り候。池内(陶所)是に事かはり、浪華などは頼をめぐり、掛物を下し、一向の事に候。是も可、死時に不、死之恥乎。少々にては仁義の事口實致し候者は可、得、意事に候。色々申上度事とも候

得共、又將軍御上洛の上、何事も可三申上候。先は餘情不宣

二月十九日

不破忠藏様

高橋有慶

安政戊午の獄に危く幕網を免れ得たる藤川は、文久三年夏、朝議危變、三條公等七卿長州に走り、幕府再び近畿尊攘黨の根を断たんとするに及び、同じく長州に走らんと欲し、同九月十六日夕景、漂然友中川耕齋を訪ひ、中川鷗處とも會し、兩人に向つて西下を促し、も、兩人未だ年少、意を決する能はず。藤川憤悶して再び言はず。翌十七日早起出發、久しうして遂に歸らず。世人其の終る處を知らずといふ。時に年四十。

數日の後妻町子遺孤を携へて中川耕齋を訪ひ、藤川の所在を訊ひしに、耕齋告ぐるに實を以てせしかば、町子大に驚き、後難を恐れて直に家に歸り、藤川が筐中の書を燼き盡せり。幾もなく彦瀨の殿網の襲ふ所となりしも、其の證左を擧ぐる能はず、且大音氏の辯明を得て幸に免るゝを得たり。其の遺孤今尙醫を業とし三上三重太郎と稱せり。

藤川著す所、桑陰村莊詩鈔一卷あり。(卷頭堤墓亭の桑陰村莊圖、大岡松堂及山根半溪の題詩あり。卷末の山本慎の跋に依れば文化二年壬戌刊行せるものなるを知る。即ち藤川出郷の前年なり)左に其の二三を抄せん。

戊午元旦
 有田足棚口。有宅足容膝。優游又迎春。早起髮自擲。呼僮擊壺從。味爽調二日吉。日吉調
 瀧酒謹再拜。洋平覺二體慄。社內春雪運。復取二來路一出。伊吹號南邊。忽已看二嫩日。日吉調
 歸來方炊熟。清酌走二醉筆。起傍二梅花下。驚語尙噴噴。衛門實正客。不遇二五六七。

家務得三餘閑

幽居類三摩詰

與三出無三殊勳

不レ如乃隱逸

見山樓

同三諸君一限三韻賦三秋曉

不レ如乃隱逸

未三結三故鄉夢

傷三心不三爲三秋

樹間鴉已起

海底日初浮

露白吟蟲聲

風清落雁洲

最先知三曉候

獨有三我懷三愁

航赴三佐波

孤洲橫跨北溪間

偶繫三短篷三夷子灣

自笑蕭然窮措大

厚顏容易對三金山

大谷刑部

首見英略熱三中興

手把三朱履三督三戰場

一死報三君臣事了

茶黃山上興三花香

茶黃山在三關原西一上有三刑部墓一

題三自著關原圖志後一

抹墨點三朱如三個忙

自慚筆底未三生三光

要下開三眼孔三看三騎音上

一卷書中大戰場

最後に擧げたる一詩に依れば、藤川、別に關原圖志の著あるを知る。但未だ其の所在を知らず。(桑陰村莊詩鈔、及藤井衣笠氏稱隠れたる勳王家三上藤川)

一〇、方外の諸家

鎌倉室町の世、學問一たび禪徒の手に歸してより、江戸幕府の代、文教蔚興して學者輩出せりと雖も文教の權は未だ全く方外緇徒の手を離れず。其の私塾寺小屋は依然庶民子弟の教育所なりき。當時我が美濃に於ても僧徒にして、經史に遠く詩文に長じ、子弟を薰化して、休明の氣を鼓吹せるもの少からず。稻葉五雲、溪毛芥、木蘇大夢、日野霞山の如き皆な其の人なり。其の功豈没すべけんや。稻葉五雲、名は道教、字は包念、稻葉氏、五雲は其の號、別に若水と號す。父名は道永。美濃池田郡

(揖斐郡)本郷村光慶寺第二十三世の住職たり。五雲は其の長子にして、文化十三年三月十日を以て生る。年甫めて十八、京師に遊びて、漢籍を貫名海屋に學び、又豊後に遊びて廣瀬、淡窓の咸宜園に入り、在學三年、業大に進む。淡窓自ら稱して攝東門生の巨擘と爲せり。天保十年(歲二十四)本山(東本願寺)學寮に入りて宗乘を學び、又智積院龍謙及び根來山大幢に從ひて俱舍、唯識を研究す。弘化元年(歲二十九)業成りて郷に歸る。

是時に當り文運未だ開けず、山陬の僻邑殆んど讀書の人なし。是に於て私塾を開き、名を皆山樓と號し、内外典を教授す。遠近縉素、其の薰陶を受くるもの蓋し前後一千餘人に及ぶと云ふ。既にして父の後を承け、住職となる。安政二年佛堂を建築す。文久三年臺殿また成る。尋いで寺門及び鐘樓を建つ。規模莊大、頗る舊觀を改むと云ふ。

明治元年大垣藩議事となる。翌二年嚴如法主擢んで、擬講となす。五年教部省命じて教導職管事と爲す。十三年住職を弟道貫に譲り、明年權大講義に補す。後屢々宗乘を大學寮に講す。二十二年一等學師補となり、尋いで權少贊教に補す。二十四年進んで副講となる。翌二十五年夏腦病に罹る。越えて二十七年一月四日少贊教に補し、明日午前一時遂に歿す。年七十九。現如法主親ら温香院、道教の諡號を書して之を遺族に賜ふ。蓋し特典と謂ふべき也。十四日遺骸を葬る。遠近會葬する者凡そ八百人、來りて其の式を觀るもの千を以て數ふ。蓋し其の徳深く人心に入るに非ずんば、焉ぞ能く此に到らん。

五雲性嚴正、其の奉事勤行の道に於ける、老に至りて渝らず。初め其の根來に在るや、他宗僧侶と同じく學ぶ。而して晨昏禮誼宗則を亂さず。大幢僧正歎賞して措かず。以て學徒奉佛の模範となせり。其

の業成りて國に歸るの日、形容稿癯將に仆れんとす。其の螢雪の刻苦知るべきなり。歿後門人相謀り、撰文を文學博士南條文雄師に請ひ、表徳碑を光慶寺中に建つ。現に同寺に存せり。銘に曰ふ。

西澗之地。山秀水靈。 池田之里。 體有二法城。 門樓堂宇。 師實經營。 學徒雲集。 環閣三書聲。
學窮内外。 人慕才名。 德維溫雅。 心存至誠。 襟帶相繼。 友三千弟兄。 紀德建石。 有若門生。

溪毛芥

又以て其の爲人を知るに足らんか。(五雲師表徳碑文、日本教育史資料)
溪毛芥、名は英順、字は秋堂、溪を以て氏となす、毛芥は其の號なり。文政元年戊寅正月八日を以て大垣船町誓運寺に生る。父、名は宜順、金陵と號す。毛芥は其の一子なり。少にして詩を神田柳溪に學び、深く經史を究め、又書を善くす。後雲華、大含、講師の門に入り、宗乘を究め、寮司と爲る。誓運寺住職たること殆んど四十年、法務の餘暇帷を下して生徒を教授す。(弘化二年開塾、日本教育史資料)門に入るもの多し。

毛芥軀幹矮にして才氣大、學問該博にして、既に釋典を修め、又儒學に通ず。性詩を好み、奇警雄拔を以て長を恣にす。又頗る酒を嗜む。其の雅筵に赴くや酣醉淋漓、歌吟笑呼、傍ら人無きが如し。而して雄篇大作杯酒交錯の間に層出す。蓋し奇男子なり。曾て小原鐵心の文壇の柄を執るや、其の盟に與るもの江馬細香、鳥井研山、松倉瓦鷄、宇野南村等皆一時の名流なり。毛芥其の間に周旋して、名を當時に知らる。鐵心の咬菜社五友歌の一節に曰く、

豪放算到毛上人。 方外結交膽氣親。 儘能使汝頭蓋髮。 論三議時機吐三心肝。
以て其の面目を窺ふべし。既にして鐵心世を謝し、同盟の士また前後鬼録に上り、毛芥獨り存せしが、

明治十六年十月十九日病を以て京都六條の客舎に歿せり。年六十六。配操子、北杭瀬村木戸、壽光寺順流、乘師の女にして、夙に賢母の聞えあり。四男一女を擧ぐ。伯良順、雲嶂と號し、後を承く。仲刺山泉氏を嗣ぐ。叔父雄南條氏を嗣ぎ、文學博士たり。季圓藤氏を嗣ぐ。越えて明治四十三年文雄師、詩文遺什を編し、題して毛芥遺稿と曰ひ、上梓以て知故に頌てり。左に其の二三を示すべし。

(毛芥遺稿、日本教育史資料)

送雪爪禪師

離情本不害禪機。塵手何能挽羽衣。

紅樹青山秋欲盡。

碧天萬里白雲飛。

同二梅塢大夢二師。飲三於鴨西酒樓。次韻二首。錄一。

倒指曾游已幾秋。

坐久東山嘆色空。

月波依舊上三鷹鈞。

一樽相對鴨西樓。

倒指曾游已幾秋。

坐久東山嘆色空。

月波依舊上三鷹鈞。

明治紀元十二月、勅發三梁川孟緯等於東山。特賜三未亡人張氏景婉。以三傳二口。蓋曠世之特典、景婉有三感懷之詩。次二其韻。

久矣神州絕三靈章。

此翁慷慨古之狂。

乾坤正氣無三磨滅。

詩句忠誠發三願祥。

七道當年廿三歲。一。

六師今日鎮三張皇。

天恩流注伯鸞骨。

餘澤涵濡老孟光。

木蘇大夢

木蘇大夢、名は良、字は髯卿、大夢、又は鏡洲、外史と稱す、本姓は小川、稻葉郡佐波村觀音寺に生る。幼より穎悟、宗乘を學び、又笠松の角田錦江に就きて業を受く。後笈を負ひて鎮西に遊び、廣瀬、淡窓の門に入りて研鑽の功を積み、耶馬溪及瓊浦(長崎)に遊びて歸る。大垣藩老小原鐵心の知遇をうけ、又江馬細香、野村藤蔭及び加納の三宅樞亭等と交好し。嘗て(安政三年)樞臺及び醫順道と大垣に抵り、細香を誘ひて鐵心に見ゆ。鐵心款待甚だ力む。大夢爛醉、歸途袍を失して裝を成すを得ず。醫順道の副袍を借り

て歸る。樞臺の詩に云ふ。

大垣歸途似三僧大夢。二首錄一。

貌如三釋老。背添三號。

風似三扇倉。腰缺三刀。

奇服裝贈人目送。

映然三道咲聲高。

(樞臺詩鈔)

以て其の磊落の風を想見すべし。

大夢夙に慷慨の志を懷き、勤王論を唱導し、幕末の際京に出で、當年の勤王家藤本鐵石、松本奎堂、木戸孝允等と交を結び、大に志士の間にも重んぜらる。また松平春嶽公の知遇を蒙り、越前地方に漫遊して、専ら勤王の大義を鼓吹せり。此の間世路艱難、流落すること七年、偶々越中に在りて維新の運に遭ひ、明治元年正月、徴に應じて京に上る。詩あり、云ふ

戊辰春日越中客舍聞三徵召詔。書三喜。

忍辱偷三生草芥中。

回天忽此見三春風。

滿腔英氣依然在。

擬下向三金階。吐三彩虹。

惜しむらくは入洛後の消息を知るに足るべき資料無きを。然れども世に傳ふる所に據れば、當年鳥羽伏見の役、大垣藩兵が錦旗に敵對して、あはや朝敵の汚名を被らざる可からざるの時、鐵心の措置宜しきを得て、幸に其の事無かりしが、其の間大夢が隠約裏の活動與りて大に力ありしは否定すべからざる事實なりと。當時鐵心大夢と鴨西の酒樓に飲し、賦して曰く、

同二木蘇大夢。飲三鴨西酒樓。

鴨西小閣有三餘清。

故就三低欄。坐三水聲。

山月未三昇輝已發。

亂流幾道忽奇明。

(鐵心遺稿別錄)

同年秋京師を退き、來りて大垣に寓し、やがて藩侯に仕へて漢詩進講の役を勤め、月俸一百兩を給せらる。蓋し、是れ鐵心の推舉によるものにして、爾後其の帷幕に參して畫策する所ありしが如し。此の

間更始風雲際會集の編あり。是れ大夢が嚮に京師に寓するの時、諸徴士と交りて、其の雄篇奇作を見る毎に之を録し、うち國事に關係あるもの若干を採擇せるものなり。鐵心すゝめて上梓せしむ。

明治二年開春、鐵心、大夢を拉して東京に赴く、毛芥の送詩に曰く、

是水老夫拉二蘇髯一赴二東京一 賦送
是水大夫棟梁。 當路雄藩三十霜。 控御有レ術多益辨。 驅二使俊髦一如レ牧レ羊。
昨隱二浮屠一今高閣。 才氣奔逸脫二羈勒一。 使レ酒撼レ驚說二勤王一。 有レ爲人達二有レ爲日一。
手攀二芙蓉一足幽谷。 名公鉅匠互商量。 嗚呼王レ眞造父駕二駿馬一。 不レ怕前程任重而道長。
蓋し兩個の交態、水魚も雷ならずと云ふべきか。

當時東北の諸藩未だ全く降らず。官軍陸續出征す。一日祖筵を江東井生村樓に開く。會する者六十二人、木戸孝允援筆詩を大夢に贈る。云ふ

越えて明治三年庚午一月大夢病を得て大垣の客舎に臥す。其の草まるに及び、鐵心赴き訪ひ、詩を賦して云ふ。

口誦二訣別句一。 手把二訣別杯一。 真情至レ此好。 仰レ天大笑來。
遂に起たず。子岐山（後出）家を嗣ぐ。

東山達二舊妓一 十畝霜二霜領一夕陽一 舊妓相逢二辨一面。 一瓶留レ我二說一滄桑。
日野霞山、名は日生、霞山人と號す、羽島郡江吉良村日蓮宗安樂寺十三世の住職にして、詩書を能く

し、且書に巧にして特に山水に妙なり。依て三絶の稱あり。梁川、星巖、村瀬、秋水、山田、訥齋と交厚く、また大垣の小原鐵心、高岡西溝、小寺翠雨、僧雪爪、毛芥等と交遊せり。鐵心が安政二年の作に曰く。

同二雪爪禪師、高岡西溝訪二霞山人、歸路雇レ舟。 湖二藍川、一雪月之奇不可言。 聖書二此二十字一。
歸舟、晴音興。 有レ客問二何如一。 醉倒人如レ死。 滿身雪寸餘。 (鐵心遺稿)

同六年の作に曰く。 洲股渡上、霞山人來迎。 欣然有二此作一。 莫二是隱流霞道人一。 掛二瓢杖上一岸二烏巾一。 晴風吹綠風風水。 舟在二江樓閣下津一。 (鐵心遺稿)

胸字具二邱壑一。 神游雲作レ茵。 交情何所レ似。 無著與二天親一。 (毛芥遺稿)
以て諸子が交態の一斑を知るべし。當時霞山が翠雨に與へたる書翰に曰く。

(前略)頃日は御祇役前、定而御多忙御察申上候。御囑之拙書も、勿々一掃仕候。盆前後は日々來客、應接無暇、其間得二小閑一候而仕候事故、甚以醜陋、貴意に難レ慚事と奉レ存候。其中又々得意之處一掃仕候而、御祇役所以二幸便一差出し可レ申候。御上程に付御一面申、別手仕度と存候而、用事繰合候處、大風雨に而、無レ據難レ致二他行一事に相成、其上、水も追々漲候様と相聞、脚躰仕候。誠に殘情に奉レ存候。彌々御發足は廿五日に候哉。起宿(尾張中島郡)邊いつ頃御通行に相成候哉、せめて起邊に而御出會申度と存候故、ざつと此者に御返事被下度候。扇子も少々貯へ候へば、相認差上度候へ共、もはや絶屬に相成候。此度は何も差上候ものも無二御座一候、是又遺憾に御座候。大夫(小原鐵心)へも宜敷御傳聲被下度御頼申上候。各國秀才之詩も御聞被レ成候は、御書付被レ成候而、御書中に御聞被下度、御頼申上候。御勤役中は不レ絶野書も差出し可レ申候。御閑暇も御座候は、御樂無レ懈可レ被レ成候。野人もここによれば、飄々然と頭陀袋を頸にかけ、杖鞋出かけ申も難レ計候。其節は御尋問可申上候。(下略)

又以て霞山の面目を知るべし。また別書に曰く
(前略)一昨日秋水より便り御座候處、彼人も山方守護之役御座候に付、暫く出遊も難二相成一旨申來、追々間暇之儀申傳候様との事、彼人

参り不申候而は、會を仕候而も不面白候に付、暫見合せ可申哉と奉存候。又々追而可申上候。此段も御序を以、太夫(鐵心)も御申達被下度奉三希上候。(後略)

是に由れば當時同人相會して屢々書畫會を開催せるを知るべし。蓋し當時霞山、法務の餘暇、私塾を開きて漢籍及書學を教授せるもの、如く、武山霞岳、坂井田江山等の書弟子あり。翠雨の如きも書法を問へる一人なり。

晚年竹ヶ鼻町大字下町に隠居し、明治五年十月十八日を以て示寂せり。法號を一地院霞山日生上人と云ふ。安樂寺には多少の資料ありしならんも、濃尾震災の際本堂倒壊して紛失せるもの、如く、墓地の如きも同寺移轉の爲め所在を失せりと云ふ。(小寺新吉氏所藏書翰、及武藤寅次郎氏の調査に據る)

竺南園、名は密乘、字は麗天、南園は其の號、一に小自在庵と號す。美濃の人(未だ郷貫を詳にせず)江戸品川の某寺に住す。性詩を好み、夙に梁川星巖の玉池吟社に參し、名を東都の詞壇に知らる。天保元年歲晩の作に云ふ。

庚寅歲晩

余烏玉兔去匆匆。

學買祭詩眞是狂。

安政某年溪毛芥の贈詩に曰ふ。

選道南園師一賦贈

湖海播名四十年。

又以て其の履歴の一端を知るに足らんか。但いまだ其の示寂の年を知らず。

(毛芥遺稿)

數口累身宜付命。

一盆欲買早梅香。

(玉池吟社詩)

忍精養老舊青山。

縱有東州風月好。

夾竹桃

維竹維桃雨不真。

花花如笑小開唇。

異根移自海南濱。

人家稱得成三林蔽。

翠嶺湘浦五更雨。

可同平安可同津。

紅春武陵三月春。

葉葉似雲纏掃掃。

第四章 衰微期

明治維新後、泰西の文物盛に輸入せられ、諸種の科學蔚然として興起せしが、一方廢藩と與に舊藩校は廢止の運命に遭ひ、在來文教の中樞を占めし漢學は甚しき影響を被り、經書はあげて高閣に束ねられ、詩文は閑人の餘技として一顧をだに與へられざるに至れり。

明治五年學制の頒布ありてより、大中小の諸學校は競ひ起り、普通、専門、高等の諸學術天下に普及して、教育は振古未曾有の盛觀を呈するに至れりと雖、從來の經術文章は總に倫理、漢文の一科を占むるに過ぎず。頽墮委靡、専門家によりて殘喘を保つのみ。往時の盛觀また再び見るべからざるなり。

さあれ明治の前半に於ては、前代隆盛の後をうけて、碩學老儒猶多く殘存し、文教未だ全く衰へたりと云ふべからず。然れ共年所を經るに隨ひ、耆宿前後凋謝して、學界漸く荒寥寂莫を感せしむるに至れり。以下各地方に分ちて、盛衰の概觀を記すべし。

一、西濃地方の文教

1 大垣

舊大垣藩は西濃の一雄藩にして、前期、藩老小原鐵心等の獎勵により、文教勃興して、曾に西濃のみ

野村藤陰

ならず、美濃文化の中心地となれること既に記せる所の如し。明治の後に至りても、老儒野村藤陰を初め、菱田海鷗、雲谷任齋、一柳芳洲、高木晚翠、田邊風外、安藤老山等の諸士あり。後進子弟を誘掖して、幾多の英才を輩出せしめ、郷黨今猶其の餘澤を被る。其の功豈偉ならずとせんや。

野村藤陰、名は煥、字は士章、藤陰は其の號なり。幼字を喜三郎と曰ふ。後龍之助と改む。父を龍左衛門と曰ふ。大垣藩歩卒にして井上左衛門の組下に屬す。母は大野郡(現揖斐郡)下方村の農加納某の嫡女なり。文政十年正月藤陰を生む。

藤陰幼にして穎悟學を好み、天保十二年元服の後、乞ひて藩校致道館に入る。居ること三年、學大に進む。同十五年、歳十八にして藩學の助教に補せらる。爾後職に在ること數年、勵精教務に力め、賞賜あり。嘉永三年父病歿し後を襲ぐ。同年母に乞ひて大阪に遊び、後藤松陰の門に入り、翌四年更に津藩の齋藤拙堂に學び、業大に進む。安政元年藩に歸り、藩校敬教室の講官に擧げらる。是歳十一月藩命を以て江戸に赴き、公暇を以て、贊を鹽谷宕陰の門に執る。此の間學業愈々進み、而して公に奉ずる忠正なり。故に屢金品の賜あり。慶應元年學館の督學參謀に進み、尋いで積勞を衰し祿五十石を賜ふ。

當時海内多故、列藩争ひて文武を講ず。藩老小原鐵心深く其の爲人を知り、委ぬるに學政を以てす。藤陰感奮弱を以て衆を率ひ、上は藩侯に侍講して時に機密に參し、下は藩校に群才を薰陶し、實學を先にし、虛文を斥け、廉耻を重んじ、禮節を崇び、一藩翕然之に従ふ。維新の際、藩主勤王の功、鐵心の輔翼に由ると雖、藤陰啓沃の力亦少からすと云ふ。明治元年十一月評定局の設あり。擢でられて上局副總裁となり、班年寄に亞ぎ、郡奉行加役を兼ね。同年督學に拜し、祿五百石を賜ふ。後大垣藩藩權少參事に進み、

専ら學政を司る。廢藩置縣に及び、仍ほ學務を管す。五年八月大藏省租稅寮九等出仕に任じ、翌六年三月母の病を以て職を辭し、大垣に歸臥せり。詩あり曰く

癸酉三月將發東京、有此作一

家江自三、背二煙波一、奈二此、鷗盟鷗約一何。

又是蕭風鱗魚候。

要下投二軒冕一、著中漁養上。

誤脫二彩衣一著二朝服。

歸心夜夜夢二慈願一。

決然今日上程去。

去向家鄉養老山。

爾後郷里に帷を下して經史を諸生に授け、(明治元年私塾を開き鷗塾と云ふ、此に至り再び塾を開けるなり)、傍ら與文義校教員總轄、師範研習學校監事、同校豫科教員、岐阜縣第一中學兼岐阜縣師範學校教員、興文學校附屬豫備學校漢學教師、華陽學校大垣分校教諭、同本校教諭に歷任し、陶冶する所の俊才其の數を知らず。西濃より出で、多少の名ある者、其の教を受けざる者稀なり。其の間戸田葆堂等と與に鷗笑社を創設し、鷗笑新誌を發刊して斯文の振興に力を致せり。社に列するもの多し。明治十八年七月教諭の職を辭す。後明治二十七年大垣中學校分校の教授を囑托せられしが、一年にして又之を辭し、爾來身を閑雲野鶴に寄せ、詩酒優游、時に或は南船北馬、跡を四方に托することありと雖、到る處唯悠々たるのみ。

二十九年十一月嗣子龍太郎東京に迎へ養ふ。時に齡七旬、三十二年三月夫人と與に大垣に歸展す。故舊争ひて之を迎ふ。偶疾に罹り月の廿五日遂に溘焉易簀す。歳七十二。越えて十七日葬儀を大垣全昌寺に行ふ。會する者無慮千五百人、遺命により茶毘に附し、遺骨を東京本郷長泉寺に瘞む。後門人相謀り、碑を舊大垣城趾に建て、小野湖山の撰文を刻せり。配増田氏、三男一女を生む。長は龍太郎(工學博士)なり。次は虎次郎、大藏省主計官となり、先ちて歿す。三男は喜三郎、夭折す。女は廣子、戸田銳之助に適く。龍太

郎小原迪の女を娶る。即ち鐵心の嫡長孫なり。

藤陰人と爲り端正、温厚にして寡黙、其の容温乎、其の言藹然、而かも眼中異彩あり。人をして自ら敬を致し、狎るゝ能はざらしむ。其の人を教ふる諄々として倦むことなし。弟子過あるも勵聲疾語せず。能く自ら省みて悔めしむ。親に仕へて至孝、誠敬太だ篤し。少時父を喪ひ、家道裕ならず。母加納氏賢にして淑、大に炊織に努め、梳嗽を忘るゝに至る。是を以て一家の經理井然として整ひ、復後顧の憂なく、能く四方の志を成さしむ。斯母にして斯子ありと謂ふべし。鐵心性豪邁、喜んで海内の豪傑と交る。往々談論風發、聲氣相加る。既にして笑語歌管大に起る。藤陰其の間に處し斂然靜默、容愈々恭しく、氣愈々和ぐ。之に近づく者覺えず自ら敬む。鐵心之を見て益敬せりと云ふ。

藤陰學經史百家に涉り、最も左氏に深し。若し夫れ詩文筆札の如きは、其の視て以て末技とする所なるべしと雖、郷黨之を貴ぶ趙璧も曾ならず。而して文章に於て最も其の長を見る。著す所左氏傳評釋、藤陰詩文稿其の他若干未だ梓に上らざるもの多し。明治四十一年嗣子龍太郎氏、遺稿(詩二卷、文一卷)を刻し、題して藤陰遺稿と云ふ。越えて大正四年十一月、今上陛下長くも即位の大典を擧げ給ふや、特に從五位を追贈せられ、生前の勳功を表彰し給へり。茲に於て有志相議し、翌五年四月、大垣公園内墓碣の前に於て、盛大なる贈位奉告祭を行へり。泉下の英靈亦瞑すべきなり。

(藤陰野村君墓碣銘、藤陰遺稿、日本教育史資料、西瀛人物誌)

重到三樓碧山房、拙堂先生別墅名、余去年寓于此。
板橋過去路、三叉、吟屋依稀竹影斜、相識山迎如故友、再遊地熱似歸家。
柳柳婚化新物華、想昨寒林著、鴻處、萬櫻滿出半天霞、白雲流水舊門巷。

鎌溪看花

是雲是霧眼朦朧、樵路穿林一線通、繞到三溪橋、忽驚却、全山埋在三萬櫻中、
兩山對峙勢崔嵬、花擁三深溪、錦障開、爛玉倒瀉響藍水、千株看作三萬株一來。

菱田海鷗

菱田海鷗、名は重禧(修して禧とも云ふ)、通稱文藏、海鷗は其の號なり。大垣藩儒菱田毅齋の六男にして格齋の弟なり。(第三章、大垣藩文教の興隆の條參照)天保七年六月を以て生る。幼にして家學を修め、長じて贊を安積良齋の門に執り、才學煥發、嶄然儕輩を抜き、特に詩文をよくす。雖股餘嘯一卷、當時研學の餘暇に成れりと雖、優に作家の域に入ると云ふ。學成りて郷に歸り、私塾を開きて(文久より元治に至る數年間)讀書詩文を徒に授く。夙に藩老小原鐵心に識られ、元治慶應の交、擢でられて藩學の教官に任せられ、尋いで評定役兼侍講に進み、上士に准せらる。慶應二年春三月、鐵心に從ひて、藤陰及菅竹洲(名は喬)等と與に東行し、海道の山水を探りて、途中横濱に清客と唱酬し、江戸に抵りて諸名流と交遊し、夏六月棲名妙義の奇を探り、木曾の險を経て歸る。亦奇錄三卷、當時同行諸子と更番に輪記せしものなり。

明治元年戊辰正月鐵心に從て京都に在り。會々伏見の役起り、鐵心の子忠、迪、藩兵を率ゐて幕軍に在り。鐵心大に患ひ、三日夜海鷗に命じ、往きて順逆を諭さしむ。行に臨み戒めて曰く、「若し聽かざれば兒の頭斬るべし、大義背くべからず」と。海鷗旨を領し從者と伏見に赴く。途に長軍の選兵に會し、縛せられて敵營に到り、伍長等と論議諍々數刻に渉る。此夜他の囚人十餘名悉く斬に處せられ、海鷗亦將に斬られんとす。乃ち北向闕を拜し、紙を請ひて絶命の詩を題す。其の詩に曰く

苦學欲酬君父恩、一燈空伴卅餘年、從容就死是今夕、只恨丹心未徹天。

字々皆熱血、隊將延見感嘆し、壯丁等に諭し、斬を止めて放還せり。乃ち京に還り、鐵心と馳せて大垣に歸り、藩論を翻し、力を王事に効す。功を以て特に祿百石を賞賜せらる。蓋異數なり。

明治元年二月京都に總裁局を設けらる、や、徵されて史官となる。同時に谷鐵臣、神山鳳陽、江馬天江等の諸先輩も亦徵されて官職を同じくす。然れども其の筆を下すの神速にして而も措詞の巧妙なる、海鷗の右に出づる者なかりしと云ふ。十一月東京に轉任し、學校取調委員を命せられ、尋で待詔局御用掛となり、累進して大史に至る。聞く、維新前後に宣告せられたる詔書及び令書の如き、其の起草に係りしもの少からざりきと。蓋し當時は海鷗の得意時代なり。是より明治十八年に至る十數年間、官職の移動甚だ多く、出でては福島縣に、青森縣に知事となり、入りては文部省書記官となり、或は長崎縣に、廣島縣に判官となりしが如き、是れ其の著しきものとす。十八年三月非職となりし以來復官途に就かず。來りて岐阜縣尋常師範學校に囑託教員となりしが、翌十九年五月職を辭し、夫より跡を東京に留め、居を窮巷に賃し、帷を下して徒に授け、以て糊口の資に充つ。其の窮困にして詩益々巧なる、人或は之を梅聖俞に比し、以て賢才の不遇を悲めり。當時交遊酬和せる者、岡鹿門、依田學海、巖谷一六、大島怡齋、元田南豊、及び鴻雪、爪等皆一時の聞人なり。

二十六年六月大垣に歸り、滯郷六旬、故山の風月に吟嘯し、傍ら、郷友の請に應じて揮灑せしもの、多くは彼の伏見絶命詞なりき。一日岐阜縣警部長久保誠之來り訪ふ。何ぞ圖らん、是れ戊辰の昔、君を刎ねんとせし壯丁の一人ならんとは。是に於て其の奇遇に驚き、慨然詩を賦して之に贈る、曰く、
我就四時君少年。
快刀爭斬夜營前。
文山不_レ死虛名在。
贏得丹心詩一篇。

是に於て始めて當時命を助けし隊將は萩藩士石部誠中なるを審にしたり。然れ共此の人十年前既に闔棺し、終に相見るを得ず。乃ち又一詩を賦し、祭資料を附して、之を萩城の墓下に供し、季子懸劍の意を致せり。詩に曰く。

萬死得_レ生干馬間。

何圖知己有_二斯賢_一。

如今淚灑終天慟。

不_レ接_二音容_一晚十年。

此の事忽ち新聞紙上に喧傳せらる、や、増野精亮と云へる人、突然神戸より書を飛ばして曰く、「當時先生を縛して軍營に歸りし者は余なり。時に余猶妙齡なりしと雖、其の事蹟は瞭乎として目に存せり云々」と。海鷗益々感慨を深くし、直に書を裁して一詩を致せり、曰く。

一封奇報價連城。

白髮何堪_二感舊情_一。

始識洛南兵燹日。

被_二君捕縛_一到_二軍營_一。

又以て海鷗の面目を窺ふべし。八月初旬東京に歸れり。後再遊の企ありしも遂に果さず。二十八年三月九日病歿す。享年六十。

海鷗人と爲り俊快剛直、矯々として節を持し、耿介にして苟も世と合はず。是を以て半生不遇に終りしと雖、詩境乃ち愈々佳處に入り、流暢蒼峭、咳唾珠をなし、萬首立ろに成る。境に觸れ景を撫して直に肺腑を寫し、復彫琢を事とせず、自然性情の正を得、言々句句皆實歷本色の語、故に琅誦の際自ら人を感奮せしめ、教化に資する者少しとせず。著す所詩文若干卷未だ世に公にするに至らず。惜しむべし。刊本は唯海鷗詩刺一卷、明治二十五年出版、一六の題字、鹿門の序、南豊の跋ありあるも元より片鱗に過ぎず。外に亦奇錄及飲夢(小原鐵心著刊本)に附載する所、詩文若干篇あり。又以て其の才藻の一端を知るべし。文は月喻一篇、記夢三篇最も見るべし。左に其の詩二三を示さん。(西濃人物誌、海鷗詩刺、亦奇錄、飲夢)

述
青山何日得歸休。

白首猶爲三章句四。

又是江南好時節。

梅花細雨憶三和州。

昔年親三梅和州月瀨。

屏

二首錄一

藥裏書籤半網蛛。

三年屏跡臥江湖。

吟情垂老如煙澗。

病體逢春與草蘇。

只喜安閑無二事。

竟知窮厄是平途。

鶯花近日行應好。

童子相携詠三舞雩。

守節梅唯潔。

無言石獨頑。

薄俗何如此。

春來懶解頰。

彼人私壟斷。

之子乞墻間。

一杯誰作伴。

雲谷任齋

雲谷任齋、名は弘、幼名雄次郎、後寛介、字は毅卿、別に坐馳又は截石と號せり。舊大垣藩士水野忠移(水野陸沈の弟)の第二子、文政十年正月十七日を以て生る。年二十一、出で、同藩士兵藤靜の家を繼ぐ。因て其の氏を冒す。後故ありて氏を雲谷と改む。蓋し其の先三河國渥美郡雲谷村に出づるに因ると云ふ。弘化四年五月家を承け、臺所組を襲ふ。翌年二月擢でられて擬講官となる。時に年僅に二十二、世以て異數となせり。嘉永四年四月進んで典籍となり、安政二年十一月主簿を兼ねぬ。典籍主簿皆藩校敬教室に關する職なり。同四年十二月多年職務に精勵なる故を以て金員の賞賜を受く。萬延元年十月聖廟臨時改築掛を命ぜらる。翌文久元年九月聖廟成るに及び賞賜を受く。同年十月江戸詰を命ぜられ、在役一年にして歸藩す。慶應二年藩に救荒事宜編纂の擧あり。其の編纂係を命ぜらる。同年又敬教室に寄宿寮習書寮造築の擧あり。又其の造築用係を命ぜらる。後累遷して詰組格に班す。明治元年六月講官に進み、且藩議院議員を兼ね、又神祇調方を命ぜらる。同年十月皇學所取立方を命ぜらる。同三年十月敬教室學則改正係

を命ぜられ、尋いて二等教授に任せらる。翌四年官各藩に令して人才を徵するや、選に預りて東京に赴き、同三月神祇官宣教係を命ぜらる。幾もなく廢官となりて、歸藩す。同年七月廢藩置縣の制出で、且官始めて文部省を置き學制を布くや、藩立の學校は悉く閉鎖せらる。是に於て翌五年五月任齋自ら主唱となり、時の有志家高木晚翠、一柳元吉、飯沼武右衛門、谷九太夫等の諸氏と謀り、官に請ひて四民共同の私立學舎を興し、名づけて興文舎と云ふ。是れ後興文小學校の濫觴なり。翌年一月官之を採用して公立とし、大垣小學興文義校と改稱す。時に任齋は其の皇漢學二等教授に任せられ、又其の創立維持に功ありし故を兼て賞賜を受く。同六年五月神宮教大教正近衛忠房公巡視して大垣に至るや、教導職試補を命ぜられ、尋いで縣社岐阜伊奈波神社祠官を命ぜられ、兼ねて權中講義に任せらる。同時に又岐阜縣第一中學區視察巡講師、兼遷喬義校(岐阜中學校の前身)皇漢學教授に任せらる。當時任齋が斯く各種の職を兼務せしを見れば、其の日夜斯道に盡瘁貢獻せるを知るべし。伊奈波神社の如きは頽破見るに忍びざるもの有りしを、任齋奉仕の後刻苦經營、大に其の面目を改めしと云ふ。然れども生來蒲柳の質、長く繁務を執るに堪へず。在職年餘、辭して大垣に歸る。明治九年私塾截石私校を開き、爾後十數年専ら後進の教養に勤む。明治二十一年一月神宮教會の聘に應じ、復起ちて大講義の職を帯び、布教に従事したれど、偶々中風症に罹り、荏苒癒えず。遂に翌二十二年八月五日大垣町字馬場の自宅に歿す。享年六十三。城北宮村星晨寺に葬る。(墓は現に同寺に在り。門人私に諭して好古先生といふ。)後數年、碑を神宮奉齋會域内に建て、野村藤陰の撰文を刻せり。

任齋幼より學を好み、伯父水野陸沈の薰陶を受け、暇あれば則ち書を読み。家用を帯びて他に出づる時

と雖も、必ず書を懐にするを常とせり。年十五、菱田毅齋に從つて儒學を講じ、傍ら鬼島廣蔭に從ひて國典を修む。又一年役に東都に就くや、其の期を利用して鹽谷宕陰の門に遊べり。其の學和漢を兼ね、就中最も經義に通じ、造詣甚だ深かりきといふ。著す所日本外史標注、唐宋八家文讀本標注、皇國千字文標注、補注左氏蒙求、日本小史等あり、並に世に行はる。而して是等の書は皆任齋が後進子弟を教養する餘暇に成れる者なり。就中外史標注は其の最も精力を注げる者なれども、外史の書たる素と頼山陽の原著たるを以て、當時頼家の名義を以て刊行せざるを得ず。依て世に公行せる者には表面、頼復二郎標注と記載せるも、其の實は任齋の專述に成りしもの也。

任齋神を敬ふの念最も厚かりしと共に、儒を信奉する意も亦深かりき。其の敬教堂に於ける聖廟の改築の如き、全く其の熱心なる畫策經營に因りて成れるものなり。廢藩後は毎年春秋二季其の家塾に於て必ず釋奠の式を舉げ、自ら俎豆を陳し、門下生をして亦皆恭しく禮拜せしめたり。

任齋人と爲り率意朴訥にして、浮華を喜ばず、世利に趨らず。専ら心を教學の事に竭せり。其の人と交るや、一小事と雖も、必ず其の道の由る所を究め、其の理の在る所を盡さざれば止まざるの風あり。故を以て或は時俗に容れられざりき。其の後進を教ふるや講說諄々、曾て倦厭の色を見ず。其の書を講するや、必ず服裝を正し、容儀を整へ、然る後席に着くを常とせり。凡そ起居進退より一言一行と雖も之を苟もせず、只實踐躬行を以て之を率ゐき。是を以て門下の者は如何なる情生も、如何なる粗笨の者も、皆等しく其の德に薰化せられて、恭敬謹嚴ならざるはなかりきと云ふ。配奥田氏先ちて歿す。繼て河村氏を娶り二女を擧ぐ、長は奥田三次に嫁す。後藤致一を養ふて嗣となし、次女を以て之に配せり。

(星長寺内墓碑、藤陰撰任齋翁碑銘、西瀛人物誌)

竹
窓外手栽竹數竿。

亭亭玉立傲三霜天。

無由三迂叟酬三聖節。

徒誦商風淇澳篇。

立 春

四方の海 浪は麗らに 春立ちて 民も榮ゆる 浦安の國。

偶 成 (五首の一)

我が邦の 神の教の 國ならば あだし道には なごか感はむ。

田邊風外

田邊風外、通稱恒八、風外は其の號、舊大垣藩士、文化十四年を以て生る。書を貫名海屋に學び、其の蘊奥を得たり。文久三年大垣南頼村自宅に私塾を開き、名づけて雲山居と云ひ、徒を聚めて漢籍及び書道を教授す。慶應二年藩學校に習書寮を設置せらるゝや、擧げられて習書掛勤務たり。明治十一年十月二十七日病歿す。享年六十二、後門人相謀り、城北岡山に退筆塚を築けり。(日本教育史資料、樂城會誌)

高木晚翠

高木晚翠、名は寅次、晚翠は其の號、後名を晚翠と稱す。舊大垣藩士、天保七年を以て生る。嘉永二年七月大垣藩學校に入り、同六年三月に至る迄漢籍を研究す。安政二年四月江戸に出で、同五年三月まで、大槻盤溪及び關研次に就きて更に漢學を研鑽す。元治元年私塾を開き、名づけて晚翠學舎といひ、徒を聚めて教授す。慶應二年十二月藩學校擬講官に擧げられ、三等教授漢學掛勤務たり。明治四年四月職を辭す。翌五年雲谷任齋等と私立興文舎の創立に力を致し、教授の任にあたる。明治二十五年病を以て歿す。享年五十七。(日本教育史資料、樂城會誌)

安藤老山

安藤老山、通稱一郎、幼名友太郎、老山は其の號、別に晴雷と號す。天保十四年五月五日大垣東久瀬

川に生る。初め菱田毅齋、溪毛芥を師として漢籍を修め、後大槻盤溪、及石井潭香に就きて漢學及書道を研究し、又畫を高橋杏村に學ぶ。慶應元年大垣藩校助教となり、明治四年三等教授習書掛勤務となる。明治七年岐阜縣師範研習學校の業を卒へ、育英に従事すること前後十數年、子弟欽仰、稱して郷先生となす。晩年聘せられて大垣高等女學校教官となりしが、幾もなく病を以て辭せり。明治四十四年辛亥五月十七日歿す、享年六十九。

老山容貌魁梧、資性酒脫、詩を好くし、又酒を嗜む。常に詩人吟客を延きて酣暢閑談す。溪雲嶂、泉刺山、岫片雲、高田鳳溪等其の莫逆たり。著す所老山詩集、香雨園詩集あり。鈔して一編となし、題して老山詩鈔と云ふ。嗣子喜一郎氏、上梓以て親族故舊に頒てり。

寄三檀友人在三江戸

落花風裏雨沈沈。

獨抱三新愁一坐三夕陰。

墨水東窗春欲暮。

問君何處寄三吟心。

宿三志津村

溪窓半夜聽三海濤。

新月上三巖巖影濕。

一脈冷風清徹骨。

春寒三十六雲峰。

一柳芳洲

一柳芳洲、名は憲、通稱元吉、芳洲は其の號、大垣の人、天保十三年を以て生る。業を井田澹泊並に其子雷堂に受け、元治元年九月私塾を開きて爰止舎と云ひ、徒を聚めて教授す。明治元年十二月出で、大垣藩社寺市政判事を勤務す。翌二年九月藩學校に出仕し助教たり。四年四月より準十六等出仕となり、藩學校助教漢學掛たり。同年七月廢藩置縣の制出で、藩學校の閉鎖せらるゝや、雲谷任齋、高木晚翠等の諸有志と相謀り、私立學校興文舎(興文小學校の前身)を興して、教授の任に當る。尋いで擧げられて安八

郡學區取締となる。後辭して帷を下し、専ら後進子弟の教養に勤む。明治十四年居を東今岡に移す。移居の詩に曰く。

面、街傍、水是吾家。

何向三山中、三鎖三辭難。

掌大森園添得在。

曉侵三風露、剪三胡瓜。

晩年中風症に罹り、起居意の如くならざるも、猶子弟の教導に任じ諄々として倦まず。前後數十年、及門の子弟千を以て數ふべし。

大正七年戊午春門人子弟相謀り、喜壽の賀筵を開く。芳洲賦して云ふ。

時茲貽滿鬢天。

二子歸家開三壽筵。

筵外風和鶯語偏。

花紅柳綠日如年。

翌八年二月廿三日病を以て終に逝く。享年七十八。二子あり。長貞吉氏嗣ぐ。次龍吉氏出で、關谷氏を襲ぎ、現に文部省圖書官たり。

高須

2. 高須

舊高須藩校以來の老儒として、明治の世に残存せるは、河原湟南、岡崎格堂、及市川董精の諸氏にして、當時南濃三學士の目あり。或は出で、學校に教鞭を執り、或は私塾を開きて後進を薰陶せり。之を外にして高木竹軒(現存)あり。詩は最も其の長とする所、世推して文壇の重鎮と稱せり。

河原湟南、名は直性、湟南は其の號、文政十一年を以て生る。幕府の碩儒安積良齋に就きて業を受け、特に經學に通ず。擧げられて藩學の教授となり、後學校の廢止せらるゝに及び、日新義校(高須小學校)の創立に力を盡し、自ら推されて校長となり、銳意經營、莘々薰化し、校基其の緒に就くや、從一位徳川慶勝公の召に應じ、世嗣從三位徳川義宣卿の侍講に擢でらる。明治八年卿薨去の後(明治十七年)岐阜縣立妻太

河原湟南

中學校の漢文科助教諭となり、文部省より中學師範漢文科教員たる免許状を授與せらる。後職を辭し、郷に歸りて靜養し、明治十九年十二月一日病を以て歿す。享年五十九。諡して清心院文譽、湊南居士と曰ふ。

岡崎格堂

岡崎格堂、名は綱三、格堂は其の號、天保五年を以て生る。業を安積良齋に受け、藩校の教授となる。藩校廢止の後、一時高須小學校の教員たりしことあり。後私塾を開き、名づけて盈進私塾と云ひ、徒を集めて經史を授く。門に入るもの多し。明治三十一年二月廿六日病みて歿す。享年六十五。(原田種徳氏談、墓碑)

市川董精

市川董精、姓は源、名は政則、市川氏、號を董精と云ひ、別に白水翁、櫻陰居士と號せり。舊高須藩士にして天保六年を以て生る。少にして藩校日新堂に學び、長じて贊を尾藩の佐藤牧山に執り、經史を研鑽し、又江戸に祇役して、餘暇を以て平田鐵胤の門に入り、皇典を學ぶ。後擧げられて日新堂助教となり、河原湊南、岡崎格堂等と共に教授の任に當る。日新堂廢校の後暫らく小學教育に従事せしが、幾もなく之を辭し、家塾を開きて後進子弟を誘導す。來りて業を受くるもの前後數十百人、郷黨今猶其の餘澤を被れるもの多し。大正四年乙卯秋九月脚疾に罹りて、荏苒癒えず。月の二十九日午前一時溘然として逝く、享年八十有一。同町日蓮宗大觀院に葬る。

董精人と爲り、軀幹短小、狀貌清隴、眼光炯々として人を射り、精悍の氣眉宇に溢る。晩年鬚髮悉く白くして雪の如し。其の書を講ずるや、音吐朗々として辯舌流るゝが如く、前後二十餘年一日の如く、子弟を教へて諄々倦むこと無し。然れども性耿介、苟も俗と合はず。家計屢窮乏を告ぐるも晏如たり。配某氏一女を擧ぐ。遂に箕裘を襲ぐもの無きは遺憾なり。

詠

日月濛濛三國光。

南柯一夢動三天王。

忠肝義膽終無比。

奇策善謀眞匪量。

滿目山河感三高潔。

關門骨肉盡三元良。

湊川祠畔碑三尺。

留得千秋氣節芳。

書

身將三澗泊一護三精神。

寡欲從來粗食親。

養得平常充塞氣。

日全三道德一又知新。

詠

腥風凜冽拂三霜毛。

跋扈深山猛氣豪。

百獸潛形皆懼伏。

負嘯嘯月一聲高。

高木竹軒、(名は貞一、通稱默齋、別號、一如、古竹、無無道人、天保三年三月生、舊高須藩士、現城山村山崎住、年八十八)は現存の人なれば、別に傳を立てず。

3. 今尾、其他

岸上老山

今尾には舊藩時代よりの普宿として岸上老山あり。老山の歿(明治十八年)後、學界委靡としてまた振はず。岸上老山、名は保、字は廣之、老山は其の號。今尾藩士。(生年及師承を詳にせず)人と爲り一目眇たり。弘化の頃より、自宅を以て弘文館と唱へ、藩士の子弟を教授す。後藩校の教授となる。明治十八年病みて歿す。年七十餘。左に其の詩一二を示さん。

秋 懷

西風雨歇水村頭。 歷歷煙光曳我愁。
 露氣橫空東去舟。 一曲聲寒誰氏篴。
 添得龍孫一早已萌。 南薰細細挺然生。
 綠酒紅燈無三舊雨。 月明三十六峰秋。
 名場官海記曾遊。 蘆花吹雪南飛馬。
 連朝瑞靄籠三枝葉。 抱節要聞憂玉聲。
 (日本教育史資料及能戶得一君寄贈老山遺墨)

其他

以上の外西濃には揖斐に棚橋天頼あり、橋爪(養老郡)に久保田象外あり、楡俣(安八郡)に棚橋碌翁あり、福東(安八郡)に森島簡齋あり。池田村(揖斐郡)に原奚疑齋あり。各私塾を開きて後進子弟を教導せり。

(天頼に就きては後章記する所あるべし)

久保田象外

久保田象外、名は吾三、象外は其の號、養老郡橋爪郷の人、久保田彌一郎の第五男なり。弘化元年十月二日を以て生る。

甫めて九歳、村上杏園(前章當時の郷先生の條参照)に隨つて漢籍を學ぶ。十六歳の時(安政六年)邑の寶光寺に於て剃髮し、名を開成と更む。萬延元年四月(年十七歳)京に上り、高倉學寮に入りて佛典を修む。不幸病の胃す所となり、元治元年郷に歸る。翌慶應元年五月病癒ゆ。乃ち大垣藩儒某(井田梧憲なるべし)の塾に遊び濂洛の學を修む。明治三年四月笈を負ひて豊後に赴き、日田の廣瀬林外の門に入り、郷魯の學を受く。越つて明治六年業成りて桑梓に歸り、家塾を開きて諸生を誘掖す。門に入るもの多し。明治三十六年一月病に罹り、同年五月廿七日遂に歿す、享年六十。男二人あり。長名は實宗、商賈となる。次名は孝作、幼にして他家に養はる。

象外、性勤直にして磊落、後學を薰陶するや、一に誠實を以てす。蓋し其の徳を蒙るもの數百人、贊を易ふるに及び、門生哀悲して措かず。乃ち相謀り碑を建て以て其の徳に報す。碑は橋爪象尾山に在り。題して象外先生之碑と云ひ、男爵井田磐楠氏の篆額、門生某の撰文を刻せり。銘に曰ふ。

學兼二儒佛。 薰三陶後生。 一朝仙去。 永留二德聲。 (碑文に據る)

棚橋碌翁

棚橋碌翁、名は碌翁、一に碌碌と稱す。安八郡楡俣村(今大蔵町に屬す)の人、文政元年を以て生る。(未だ師承を詳にせず)安政の初私塾を開き、徒を聚めて漢籍を教授す。慶應の際を最も盛とす。明治の後、學制頒布せられて小學校起るに及び之を廢せり。

碌翁傍ら俳諧を好くし、美濃派の正統をうけ、獅子庵を承繼す。晩年岐阜に寓して、「獅子の林」一てふ

雜誌に筆を執る。明治二十四年の濃尾大震に際し纒に身を以て遁れ、書籍の類悉く烏有に歸せるを以て發刊を廢せり。明治二十九年七月二十三日洪水の中に自宅にて病歿せり。享年七十九。(日本教育史資料、大日本人名辭書)

森島簡齋

森島簡齋、名は敏昌、幼名春吉、通稱徳左衛門、簡齋は其の號なり。文化五年正月十五日、安八郡福束村字里に生る。幼にして、林博教の門に入り、書史を學び、後尾張藩關流の大家永田有功に就きて數學を研鑽し、長じて益々斯道の玄旨に精練し、帷を下して數學及び漢籍を教授せり。明治の後自村の謹節小學校及び近村の小學校の數學巡廻教師となる。前後其の薰陶を受けしもの頗る多し。明治八年地租改正の際、田畑測量法を多くの人々に教示し、自村の如きは一回にして無事官の検査を終了せしめたりと云ふ。明治十三年二月廿八日病を以て歿す。享年七十三、其の病蔭に在るや、高足森島、川瀬、河合

の三生を召し、懇篤に數學の玄旨を傳へ、既に危篤に及び始めて免狀を與ふ。衆其の深慮に服せりと云ふ。著す所、簡齋算草七卷及び社中算約一卷あり。明治三十五年九月門弟及び有志者相謀り、篆額を南條文雄博士に、撰文を藤圓謙師に請ひ、碑を里村益法寺に建て、以て師恩を不朽に傳ふ。碑は現に同寺に在り。(森島簡齋碑、西濃人物誌)

原奚疑齋

原奚疑齋、通稱善助、揖斐郡池田村下東野の人、舊大垣藩士、出で、原氏を襲ふ。貫名海屋の高弟にして、詩文を好くす。夙に大垣藩老小原鐵心と交を訂し、勤王の志頗る厚く、當年の志士と詩酒の間に國事を談す。賦する所の詩、多くは治國安民にあり。其の郷に私塾を開くや、近郷子弟はもとより、大垣藩より入門せしもの極めて多く、或は遠く京都より笈を負ひて來るものあり。今の温知小學校の如きも全く其の創設に係るものなりと云ふ。

先年門下諸士相謀り、碑を建て、其の徳を傳ふ、辭世の詩に曰く、

偶成

一片丹心萬古明。生前死後共同情。紅歌浴海將レ升處。暫有三香烟護レ曉櫻。

子松蔭氏は田能村直入の門下にして書を好くすと云ふ。

此の他安八郡鹽喰村(現福東村に屬す)に安田東野あり、(名は善左衛門、安政より明治に至る十餘年間、家塾を開きて漢籍を教授す。子豊洲、名は道雄、野村藤陰に就きて漢學を修め、詩文を好くせり。)海津郡徳田村(城山村の字)に吉谷覺齋あり、(淨嚴寺住職、慶應明治の際私塾、研精學舎を開きて漢籍を授く。後、東本願寺大講師たり)揖斐郡三輪村に西川直助あり、(文久初年より明治に至る十餘年間、私塾、興進館を開きて漢籍を授く)不破郡表佐村に飯沼徹あり、(安政三年より明治六年に至る十數年家塾を開きて漢學及び書道を教授す)各私塾を開きて子弟を薰陶せり。(日本教育史資料)

西濃文壇の概観

4. 西濃文壇の概観

維新以後漢學の不振と共に、詩文また著しく衰頹せりと雖、前期隆盛の後を承けて、風雅未だ地に墜ちず。作家の名あるもの、大垣に野村藤陰、戸田葆堂及び江馬金粟あり。神戸に杉山千和あり。大跡(養老郡廣幡村)に戸倉竹圃あり。流風餘韻、今猶綿々として絶えざらしむ。特に藤陰、葆堂等が同志を糾合して笑社を創設し、雜誌笑新詩を發兌して斯道を振作せるは、其の勞頗る多とすべきなり。

戸倉竹圃

戸倉竹圃、名は忱、字は有終、通稱六郎、竹圃は其の號なり。本姓水谷氏。天保三年三月、下石津郡安田新田(今の海津郡西江村)に生る。兄弟十二人、竹圃は其の末子なり。九歳の時名古屋に出で、或は表具屋の弟子となり、或は醫家の書生となり、備に辛酸を嘗む、然れども學問の志厚く、夜間少暇を得て漢籍を研習す。天保十四年歳十二、始めて高須藩儒川内當當(第二章高須藩の文教参照)の門に入る。後間々進退ありと雖、教を受くる十餘年、志操益々堅し。時に養老郡大跡村の戸倉耕月庵が養子を求むるに遇ひ、或人竹圃を推薦せしに、耕月庵は貧富衡を失せるに關せず、其氣骨と忍耐とを愛し、遂に迎へて養嗣子となし、配するに其の長女を以てせり。竹圃時に十九、未だ白面の一書生に過ぎざりしが、養父の信任頗る厚く、直に家事を擧げて一任せられたり。

是に於て耕月庵齡四十一二を以て隱居し、心を俳歌に專にし、身を風月に寄せ、遂に蕉翁十四世の宗匠となり、俳名世に著る。竹圃家を齊ふるの傍ら、養父の膝下に奉侍し、且俳歌を學びて其の興を佐け、毎夜三更に到らざれば寢に就かず。而して竹圃の好む所は俳道に非ずして詩文なれども、養父の好める道に非ざるを以て敢て之を口にせず。深更家人の眠り去るを待ちて竊に起き出で、書室に入り、靜に點

燈して黙讀研究するを例とせり。適々左傳を讀まんと欲するも書なし。竹圃時に金錢の出納を司り、之を買ふこと自由なれども、養父の意に副はざるものを買ふを屑しとせず。實父に請ひて之を購求し、暇あれば熟讀玩味し、造詣最も深かりき。養父五十四五歳の頃脚疾を患へ、横臥すること九年、竹圃よく之に事へて少しも違ふこと無し。養父歿後僅に閑散の身となりしも、元來身虚弱なりしを以て終年殆ど門を出でず。粗衣粗食に甘んじ、唯遠來の客に接するを以て樂となすのみ。當時著名の文人岡本黄石、藤井竹外、森春濤、大槻盤溪、清原梅東等の如き皆其知友にして、多くは來りて其の居養老山房を叩けり。諸友又屢々其の出遊を勧めしが、多病の故を以て遂に果さざりき。當時の美濃の文人野村藤陰、角田錦江、宇野南村、戸田葆堂、江馬金粟、日野霞山、高橋杏村、山田訥齋(名は惟孝、笠松の畫人、梅逸の高弟)等の如き、亦概ね交を訂せざるはなし。明治十四年九月廿七日病歿す。享年五十。梅室氏(森槐南門人)は其の孫なり。竹圃最も詩文を善くす。其の詩、清澹雅健、品、范陸の間に在り。就中其の七律は對仗齊整、氣格音調俱に備り殊に出色を推す。絶句また婉轉の致多し。竹圃また兼ねて書道に巧なり。其の書頗る頼山陽に似たるを以て、狡徒時々來りて揮毫を求め、且山陽の名を署せんことを乞へども、竹圃其の不徳を責めて斷然拒絶せり。著す所養老山房詩鈔五卷あり。詩三百餘首を抄録す。野村藤陰の跋に曰く、「竹圃山人、天資善病、屏居門を出づること稀なり。性甚だ詩を好み、起居飲食、勝景樂事皆詩に於て之を發せざるなし。其の詩清秀雅淡、絶えて塵俗の氣無し。蓋し山人は養老山下に住み、目名山に飽き、耳を靈瀑に洗ひ、復た人間榮辱の事を知らず。宜なり、其の詩の王孟韋柳の域に出入するや。」と、左に其一斑を示さんか。

千歲樓春眺

酒人凭處危樓小。

樵唱歸邊仄徑斜。

細雨空濛天向晚。

餘明猶在白櫻花。

昨風今雨恨無端。

匣裡秋生劍氣寒。

壯士平生多感慨。

天家社稷入三鞭。

衰柳予寧弱質嘆。

柔克制剛君識否。

殘杯渴下鐵心肝。

浮鷗汝亦風波浴。

二月十七日携生徒遊養老山

多度山頭宿雨乾。

登登一路出三林端。

千年古廟存靈跡。

百尺危樓供壯觀。

瀑邊香進石根關。

掃苔苔破新詩句。

風捲人衣特地寒。

雲表影冲松頂竈。

壬申冬月、森春濤翁來在予家、每夕招三同近隣吟徒一分韻賦此三十首。

百年家法不傷廉。

繞膝兒孫恭且謙。

鏡裡霜痕吹鬢末。

燈前喜氣上眉尖。

高堂豈防三時蟹螯。

若問三吾儂何所得。

鍊詩才力幾分添。

(養老山房詩鈔、四漁人物誌)

迂愚多被世人笑。

杉山千和

杉山千和、名は顯、字は孝夫、千和は其號、通稱又吉、安八郡神戸の人、文政四年を以て生る。幼より聰慧、少にして業を添川仲顯(名は寛夫、別號麻耶山人)に受け、詩に巧なり。特に棋技を能くし、十三歳(天保四年)にして初段に入る。大垣藩主泰嶽公(兵衛、園恭に妙にして、畫を能くす)之を聞き、此の歳、召して其の技を視る。千和時に賦して曰く

三月春風棋席響。

肯容童子到仙庭。

君侯曾巧三橋中伎。

當三是曹龍授三九經。

公大に嘉賞して特に自筆の欄柯圖を賜ふ。光榮思ふべし。後其の技愈々進みて六段に昇る。然れども中年以後感ずる所あり。殆ど棋を廢して専ら讀書詩文に耽る。當時三都著名の文人岡本黄石、小野湖山、大沼枕山、依田學海等概ね其の交友なり。明治七年大垣雜詩一卷の著あり。其の居を瑞鷄樓と云ひ、別

に亭を築きて枕流得月亭と云ふ。明治十年岡本黄石來り訪ひ、留まること十餘日。其の瑞鷄樓に題して云ふ。

閩郷之長果如何。 累世之家祥瑞多。
 百事般々一意注。 有二何餘力一能學レ文。
 或征而戰或迎戰。 鑿二殺四方勳敵一來。
 只養三餘生二樂三詩酒。 令耶風有三清才名。

近起レ樓將二瑞鷄一喚。 一家和睦號三千和。
 天與二別才一善二詩句一。 更驚秋評最別才。
 老來斷乎收二其手一。 棋局亦沒三塵埃二久。
 用二力詩章二期三大成。 餘暇聊吟仍對酌。

鶴鳴而起孳々移。 年少五品真奇哉。
 對レ人今日如レ不知。 天倫至樂觀二親情一。

(下略) (黄石 詩鈔)

又以て其の行事の概要を知るに足らむ。詩中謂ふ所の令郎は子三郊氏(名は令吉、字は直心、別號養老山樵、現早稻田大學教授)を指せるなり。父唱子酬、其の樂想ふべし。齡八十餘にして病歿せり。其の詩真率、其の人の如し。左に其の二三を示さん。

養老 瀑布 結構非二人作。 天然似三鬼工。 銀旗懸二絕壁。 玉屑散三虛空。

帝傾三雲漢水。 瀉向二老山中。 直下三千丈。 萬峰起三烈風。

大垣雜詩 原三十四首 客歲余屢遊二大垣一 懷レ古感レ今。作三雜詩若干首。今閱レ之。鄙俚不レ成レ調。重複可レ厭者。居多矣。然則刻焉則失三本土實況一者亦不レ鮮。因姑存稿。聊示二三同好二以博二一樂一。豈敢貽二笑于大方一乎哉。時明治八年小春。識二於神戶瑞鷄閣楓菊双清處一。

男兒高致婦嫻媚。 三十六街豪賈連。 欲レ識三此種風土美。 人家到處有三清泉。

枕水樓頭歌吹。 缺瓜船外柳絲斜。 南來北去人如織。 橋影波光小浪華。

江馬金粟

江馬金粟、名は桂、字は元齡、幼名千次郎、金粟は其の號、別に香雨と號す。文化九年七月五日を以て生る。細香女史の姪孫にして活堂(元益)の弟なり。

憶昔春殿對三秋杯。 花擁三雕欄一醉三子聲。 寒煙蔓草大垣城。

關香 一細香 通稱元齡、本姓溫井 一元益 字春齡、號藤渠 筭莊 名元義 致仕後稱活堂 字信成 配 細香之妹栢種子 一金粟

金粟少にして頼山陽の門に遊び、後、洋學を浪華の岡研介に學ぶ。長じて醫を大垣竹島町に開業す。醫道中興の稱あり。安政三年三月擧げられて藩費洋學館教授となり泰西書を講ず。其の歲十二月俸五口を賜ふ。維新の後筑摩縣(松本に在りき)に聘せられ、學務を掌る。後又滋賀縣に聘せらる。最も詩に巧に、且書を能くし、又山水を畫く。明治十五年一月五日病みて歿す。享年七十一。其病革るや辭世の詩を賦して曰く

人間七十世所レ少。 二豎襲來將レ奪レ生。 不用青山埋骨處。 藤溪村外有佳城。

金粟此の詩を思ふの時、瞑目之を久しうす、子春熙思へらく、命已に絶せりと。忽にして目を開き、筆を採りて纔に第一句を題し、復た書する能はず。三句を口占して遂に逝くと云ふ。杉山千和の哭詩に曰く

決然厭レ世化三飛仙。 不レ傲尋常赴三九泉。 縹緲乘風遊三帝側。 高談雄辯震三諸天。

又以て其の爲人を知るべきか。著す所、療治口訣拾遺、佩文餘瀆、金粟詩鈔等あり。(鷗笑新詩、藥城會誌)

戸田葆堂、名は光、字は修來、通稱鼎耳、初め葆逸と號し、後葆堂と改む。別に葆真堂、問鶴園、十洞天齋の號あり。舊大垣藩臣戸田義尙の長子なり。嘉永四年十一月二十九日を以て生る。父義尙家を繼がずして歿す。葆堂時に歳十六、祖父義賢の後を承けて、祿七百五十石を食み、御番頭に任じ、藩主戸田氏共公に侍して、四書五經を講習す。穎悟強識、王父小原鐵心、深く之を愛し、常に人に語りて曰く、「姪孫鼎耳あり、以て意を強うするに足る」と。

明治二年王父に従ひて東遊し、昌平黌に入り、刻苦精勵、業大に進む。居ること二年、病を載せて還る。藩儒野村蔭及び岩瀬尙庵、井田澹泊等に就きて、其の蘊奥を敲き、出藍の譽ありきと云ふ。岐阜縣令小崎利準、抜きて官に薦む。葆堂病と稱して固く辭す。後京師に遊び、諸名流と詩酒徵逐す。會々清人陳曼壽(名は鴻齡、詩及書を能くす)來りて大垣に寓す。乃ち就きて詩法を問ひ、得る所少からず。葆堂また象ねて渲染を善くす。初め天野方壺に學び、後明清諸家の名蹟を參觀し、別に旗幟を樹つ、酣古高逸の致掬すべし。然れども畫家を以て自ら居らず。及門の士大橋翠石の如き、最も其の秘訣を得る者也。明治十四年同志と相背りて、鷗笑社を創設し、野村蔭を推して社長とし、自ら編輯長となり、月刊雜誌鷗笑新詩を發行して斯文を鼓吹す。盟に加はるもの多く、また文壇の一偉觀なりき。

葆堂資質蒲柳の如く病を擁し榻に臥して客に接す。或は儒流と經義を辨じ、或は老稱と立理を談じ、二豎の身に在るを知らず。明治四十一年七月七日遂に歿す。享年五十八。桃源山先塋の次に葬る。男泰氏(號芸窓)家を嗣ぐ。著す所、問鶴園遺稿(大正四年十二月上梓、木蘇岐山點、牧野交翠編輯、舊藩主氏共伯題詞、藤澤南岳石川柳城、原田西晴の序、木蘇岐山の跋等あり)一卷あり。左に其詞藻の一端を示すべし。

傷春調 原二

風流誰也杜樊川。 舊夢無痕易惘然。

一笛春殘柳浦煙。 逝水年華挽難駐。

寒夜 原三

萬感纏綿借酒開。 海山處處是蓬萊。

貧仍有骨瘦於梅。 思量榮夢夢中幻。

題三梅下書屋圖

名利夢中夢。 乾坤機外機。 不若梅花下。 蕭間掩板扉。

當時笑社の詩盟に加はれるもの、野村蔭、江馬金粟、杉山千和、溪毛芥、一柳芳洲、(以上既出)諸老を初とし、杉山三郊、小川果齋(後の木蘇岐山)溪雲璋(貞順)戸田眠鷗(寬)齋藤百竹(龍)兒玉石峰(成岸觀瀾)

(寬)清水任所(榮藏)金森後凋(毅庵)早川樸堂(精)關口子裁(章)矢野栗所(精)高木如石(保)若園蕉窓(貞)脇坂竹垞

(亮)棚橋藍水(繁)牧野交翠(鐵九郎)中島蘆舟(靖)安田豊洲(道雄)山川雪鴻(賢)戸崎英嶽(增)等の諸子あり。

(此の内現人の存少からず)また以て西濃文壇の盛況を窺知するに足らむ。

二、中濃地方の文教

1 中濃出身の諸家

明治維新の前後、中濃より出で、名を東西に知られたるものに棚橋松村、同天額及び神山風陽あり。松村は東京に出で、經學を以て著れ、風陽は京都に出で、文章を以て知らる。また天額は或は師範學

校に長となり、或は私塾を開きて子弟を薰陶せり。稍後れて木蘇岐山あり。晚年大阪に移り、關西詞壇の重鎮を以て推されき。

棚橋松村

棚橋松村、名は嘉忠、字は伯實、初の名は春隆、字は隆郷、通稱八郎、後大作と改む。松村は其の號、又別に栖鶴と號せり。山縣郡伊自良郷松尾村地代官棚橋新五右衛門の長子にして、文政十年丁亥を以て生る。天資英邁、幼より好んで書を誦し、尤も詩賦を嗜む。十六歳の時朱子文集語類を讀み、歎じて曰く「道此に在るか。」と、因て其の學を研究せんと欲す。しかれども僻邑師無きに苦しむ。十七歳眼病に罹り、此より往苒癒えず、將に盲せんとす。醫乃ち讀書を嚴禁す。松村肯はずして曰く、「縦令讀書に因りて肉眼の明を減すと雖も心眼の明を増すに若かんや。且つ埒檢校、長澤樂浪皆盲にして偉人たり。余も亦二子の蹟を追はんと欲するなり。」と、乃ち人を倩ひて書を讀ましむ。年二十五、遂に全く明を失へり。

二十六七浪華に出で、廣瀬旭莊に就きて詩學を究め又傍ら諸子雜家に涉る。而して朱子を信奉するは終始變らざるなり。當時同窓の友に長三洲、芝六郎、金森摩齋等あり。皆松村の爲に代り讀み、代り筆し、以て其の業を勵む。此の間配梅巷女史を娶る。女史姓は牛尾田氏、名は絢子、字は文遠、梅巷は其の號、浪華の人なり。初め松村の浪華に寓するや、奥野小山と善し。女史嘗て小山に學び、才學を以て聞ゆ。松村之を娶り以て其の業を助けしめんと欲す。小山之を介し、遂に松村に歸ぐ。時に年十九。是より夫妻勉學、其の業共に進む。未だ數年ならずして、家荐に厄に罹り、浪華に安んずる能はず。家を舉げて其の郷松尾村に歸る。

此の時に當り海内多故、幕政振はず、各藩の志士往々藩を脱して尊王攘夷の論を唱ふ。松村其の兩弟天額及び平松雪枝と與に之を讀し、季弟をして家を承けしむ。家本と聞右と稱す。志士と往來するに及び資産殆んど罄く。是に於て郷里の子女を教へ僅に以て生を營めり。而して配梅巷女史其の間に居り、家中の事一に自ら任じ、上は衰老の舅姑と失明の夫に事へ、下は一男二女を鞠育す。初め女史家資に饒にして、父母鍾愛、嫁装頗る盛なり。此に至り之を典賣して以て家計を補ふ。匿中の物空となる。況んや舅姑の喪に遭ひ、困弊極り至る。是に於て出で、雜業に就き、時に蒼頭赤脚と伍し、家に歸れば薪炊澀澀し、備に辛酸を嘗む。而も數年の間倦まず、屈せず。後松村移りて尾張の一宮に居り、又刈安賀に移り、私塾を開きて子弟を教授す。女史之を助く。明治五年名古屋市、女史を聘して小學訓導となす。女史時に三十四歳なり。

後松村移りて東京に出で、經學詩文を以て名を當時に知らる。其交遊する所中村敬宇、根本通明、岡本監輔、杉浦重剛、長三洲、内田周平等の諸名士にして、文詩徵逐率ね虛日無し。異行美躅枚擧するに暇あらず。明治八年女史聘せられて東京女子師範學校訓導となり、越えて十一年學習院教授となり、嗣子一郎をして大學に學ばしむ。現に中學郁文館長なり。(明治三十六年女史東京女學校を創立し、自ら其の長となる、四十五年三月初延其の教育の功績を賞し、勳六等に叙し、寶冠章を賜ふ、榮と謂ふべし。)明治二十六年五月廿五日松村病を以て歿す。享年六十七。谷中全生庵に葬る。

松村學極めて博く、又兼ねて經綸の才あり。其の學小出入有るを免れずと雖、大體程朱の範圍中に在り。失明以來は吟詠を以て自ら娛み、篇什また頗る多し。嘗て其の平生讀する所を問へば、答へて曰く、

「淵明集、寒山集、擊壤集なり。」と著す所詩文稿若干卷あり、家に藏すと云ふ。明治三十二年五月其の七週忌辰に際し、嗣子一郎氏、中に就きて首尾吟六十一首を鈔し、上梓以て故舊に頒てり。(楠本幸嘉の序、内田周平の跋あり) 其の詩、上は濠洛關閩より、下は本邦近儒に至り、其の要を提し、其の綱を挈し、人をして一目の間に瞭然たらしむ。又以て其の造詣の一端を窺ふべし。左に其の二三を鈔録せんか。

首尾吟做三原六十一首

先生不三愛三吟詩一	壁緒茫茫繼述時。	大極圖開三千古秘。	易通書發二十傳遺。	人君子愛三花君子。
道意思同三草意思。	借問孔顏樂三何事。	先生不三愛三吟詩一	周濠溪	氣平當三議三國家事。
先生不三愛三吟詩一	繼啓全功垂後時。	出入十年窺三殿壁。	反求一旦擊三王師。	程明道
心樂豈無三花柳知。	細味三異端似三同異。	先生不三愛三吟詩一	左三朱右三陸執常師。	武人間爲三蒼生三獸。
先生不三愛三吟詩一	吾學東漸首唱時。	送佛歸三何卓見。	藤惺窩	
文集序荷三明主知。	重聘敢辭他弗聘。	先生不三愛三吟詩一		
大道如三大地。	須臾不三可三離。	不三可三離之故。	相忘人不三知。	不三知知之至。
是所三以其大。	是所三以其夷。	夷大何爲者。	踐之不三知レ之。	譬猶舟中客。
泰山雖三無三上。	滄海雖三無三涯。	畢竟一物耳。	不三出三地範圍。	小道自爲三。
巍乎仰所三崇。	漚乎走所三歸。	豈翅心上事。	惟微與三惟危。	擇三善宜三精三。
偉哉理氣力。	運轉無三靈期。	欲三知三無靈妙。	請問無言師。	固執亦三疑。

讀三晉人傳三寄三石川文莊一

棚橋天籟

世間自在讀書音。廢卷休言誤此生。心不動邊眞活潑。月無見處却分明。花忘三開落一終年。月外三陰晴一永夜清。奇筆欲三千古眼。晉人傳就學人驚。(首尾吟、文莊漫錄、士屋鳳洲撰梅巷女史傳)

棚橋天籟、名は嘉和、字は禮仲、通稱衡平、天籟は其の號、棚橋松村の弟にして、新五右衛門の次男なり。天保五年四月十七日を以て生る。幼名彌太郎と稱し、二歳にして揖斐莊旗本岡田將監の家臣長澤森之丞に養はれ、後名を喜滿太また敬太と改む。

天籟幼時名古屋に在りて奥村定輔に就き讀書算を學ぶ。後養父に従ひて京に出で、湯淺一學、花房猶龍等に就きて、書及び漢兵學を修む。後郷に歸り、嘉永三年以來岡田家に仕ふ。此の前後家兄松村の薫陶を受け、専ら漢學國學を修め、又江戸に在りては深石要、林鶴梁に従ひて兵學及び文章を修め、京都に在りては梅田雲濱、梁川星巖に従ひて漢學詩文を、渡忠秋に従ひて國學を修む。

安政六年、時恰も國論沸騰の際、年二十六にして主家の命を以て江戸に上り、赤坂藥研坂岡田將監邸に在りて、専ら家臣子弟文武の教導に任ず。此の際義弟芳郎に養家家督を讓、棚橋に復姓して、名を衡平と改め、久しからずして江戸を辭して國に歸る。

天籟夙に慷慨氣節を以て自ら任ず。遂に感ずる所ありて、主家客分の待遇を辭し、揖斐長源寺に浪居を構へ、全く食祿を離れて、屢々京師浪華に遊び、勤王志士の間に投じて多く家に在らず、具に艱苦を嘗む。

元治元年十二月朔日夕、水府浪士武田耕雲齋、藤田小四郎等の揖斐に來るに會し、一家中騷擾、策の出づる所を知らず。天籟岡田家の意を含み、身を挺して折衝の任に當り、地理並に近藩の動靜等逐一獻

策して參謀の便を計り、浪士一行を優遇して、軍用金其の他調達の要求に應じ、専ら幹旋の勞を執り、主家をして難を免れしめたり。時に年三十有一。

是に於て再び京洛に遊び、大原重徳、岩倉具視諸公家に入出し、家弟平松雪枝等と共に、依然尊攘志士の間に投じ、又多くは郷里に在らず。越えて戊辰政變の際、岩倉東山道鎮撫使の東下に會し、時恰も岡田家々臣は、守奮革新の二派に分れ、互に相擠陥して形勢頗る混沌たるものありしが、天籟は毅然革新の政策を以て守奮派を壓し、遂に一家中の論議を統一して、茲に二小隊を編成し、以て岩倉鎮撫使の手に屬し、二番御馬廻隊として従軍せしめ、或は流山に、或は宇都宮に、關東各地に轉戦して戦功を建てしめたり。此の際天籟は竹澤寛三郎召捕事件の爲めに加納より従軍せず。家弟平松雪枝をして代り行かしめ、自ら留りて岡田家々臣の統御に任せしもの、如く、尙寛三郎召捕(加納藩永井肥前守の手にて召捕らる)の後、之に代ふるに長源寺の己が浪居に潜伏中の水府浪士梅村速水を以てし、且林善兵衛を參事に、高間源八を小參事に推薦して、速水に附せしめたる事等は、専ら天籟の幹旋に出づる所にして、其の一行の飛驒に赴く一切の準備の如きも亦皆其の手に成りしものと云ふ。

維新の後、同志の一人たりし藤井千尋の推舉を以て、東都に出で、三條實美公に仕ふ。幾も無く公の内意を受けて、同家々政の改革を決行するに當り、譜代家臣の怨府となり、一身危難に瀕すること屢々なりしも、萬難を排して家政の整理を成就し、遂に公の推舉を被り、明治三年五月民部省租稅權大輔に任せられしが、其の意に非ずとて辭して拜せず。翌四年同家を辭して故山に歸り、其の年十二月北方村字西平に移住し、三條公の出資を以て荒蕪地の開墾に従事せり。

越えて明治十一年に至り、北方村を去りて京都府屬に就任し、十三年十二月職を辭して郷に歸る。翌十四年二月岐阜縣池田郡長に任ず。二十一年五月岐阜縣尋常師範學校長に轉任し、兼ねて岐阜縣屬第二部學務課長を命せられ、二十三年二月職を辭す。二十五年二月更に大阪府立農學校長に任せられしが、二十八年五月職を辭せり。

是に於て姪男棚橋一郎其の老を憂へ、之を東京に招致し、自ら經營する私立中學、郁文館に教鞭を執らしめ以て老を養はしむ。越えて三十六年姪一郎郷里揖斐郡に於て衆議院議員の候補に立つに當り、爲に幹旋する所あらんとして、揖斐町に復歸し、爾後郷里に住し、依然姪一郎の扶助の下に老を養ふ。四十年揖斐町有志の援助を以て、私立天籟私塾を創設し、教育の普及に勉めしが、四十三年十月二日病を以て歿せり。享年七十有七。

天籟性書を好み、特に草書に長ず。平居詩を賦し、山水を畫き、老に及んで衰へず。著す所天籟詩文稿若干卷あり。左に其の詞藻の一斑を示すべし。

失

題 原十首

牛生勞力漫隨緣。

休歇蘇家二頃田。

老病頻繁寬二閑地。

壯心零落著三高天。

風流久負陶元亮。

高傑空憐魯仲達。

獨有三嫩鶯同三止處。

梅花香裡若三忘三遷。

姪男竹隱爲余設二家于駒込蓬萊坊。

喜賦二五言十二律。

詩表三謝意。

節一

新居何適三意。

枯骨春三又同。

塵土備三風掃。

書窓研三竹開。

空囊雖三缺三酒。

誰道蓬萊遠。

移三家容易來。

四 平 雜 興 美濃大野郡北方村 余所三開拓一也

游絲縹緲。春風依舊掃三園。餘生又是二三清課。

雨後啣泥燕子飛。公事不來庭院靜。

長歌雜草種三齋。倦眼時抄種樹書。

偶

成 傲三淵明休一節二

與雲共卷舒。

草根鋤不盡。塵事掃難除。安得三天邊住。

壺中有三餘。猶足灑三枯腸。

笑我閑居樂。欲言言已忘。

(天鏡詩文稿、柳橋暢吉氏寄 柳橋衡平略歷)

神山風陽

神山風陽、名は述、初の名は至明、字は季德、通稱四郎、鳳陽は其の號、別に三野と號し、晩にまた古翁と號せり。家世々美濃方縣郡上土居村(今稻葉郡常磐村に屬す)に住す。村は鳳凰川(長良川)の北に在り。鳳陽の號蓋此に取るなり。父名は永貞、母は栗本氏、長兄義安、通稱精一、乙井と號す、家を嗣げり。

鳳陽文政七年を以て生る。幼より穎悟、讀書を好む。少壯京師に遊び、師友を求め螢雪の功を積む。(未だ師承を詳にせず)特に詩及書を好くす。遂に京師に住し、私塾を開きて徒に授く。神鞭知常、南挺三等其の門に出づ。曾て(文久初年?)隣閭火あり。延いて其の廬に及ぶ。鳳陽賦して曰く

災

後 賦 詠

休言同綠志殘虐。

無恙胸中萬卷書。

以て其の洒落の襟懷を想見すべし。

明治元年二月京都に總裁局の設けらるゝや、徵されて史官となりしが、久しからずして職を辭し、林下優遊吟詠を以て樂となせり。當時著名の文人、岡本黃石、小野湖山、藤井竹外、頼支峰、江馬天江、宇田栗園、谷如意、淡海槐堂、富岡鐵齋等みな其の交友なり。推して文壇の老將と稱せり。鳳陽もと劍を好むの癖あり、多く古劍を藏す。岡本黃石嘗て爲に古劍歌を作りて之に贈れり。身久し

く紅塵の都門に在るを欲せず、やがて歸田の計をなし、が、未だ決する能はず。明治二十三年四月三日遂に病を以て歿せり。享年六十七。(或は二十二年歿すとなすものあり誤れり)東山智恩院に葬る。小野湖山の挽詩に云ふ。

神山風陽老友挽詩 老友有好劍癖

澹然而逝何其急。

不似平生氣象寬。

醉醒談語泉水湧。

傲餘翰墨老龍蟠。

長嘯薄俗推遲早。

深恨中流砥柱難。

一劍磨光常自愛。

惜君畢世將文壇。

子神山甲次郎嗣ぐ。著す所鳳陽遺稿あり。(明治三十二年門人神鞭知常、南挺三編輯)左に其詞藻の一斑を示さん

虎

吻血迸如雨。

一聲林壑振。

君能驅二百獸。

其奈三獸心。

石

湖光百頃鏡空開。

誰向三香鑿一用。

海暮雨過秋一洗。

山如三翠髻二月如眉。

影管點朱三絕章。

才兼三齒德一古來稀。

天機偶向三詩篇一發。

閑對三金籠一教三雪衣。

永源寺觀楓次三星巖題七絕五首韻一錄

衣巾蕭散髣髴斑。

穿過霜紅寒碧間。

老來未覺浮世夢。

愧甲三寂公三重入山。

木蘇岐山、名は牧、字は自牧、初の名は僧泰、果齋と號す。後に岐山人と改む。別に三壺軒主人の號あり、本姓は小川、厚見郡佐波村(今は稻葉郡日置江村に屬す)の人木蘇大夢の子なり。

岐山安政三年を以て生る。幼にして岐嶽、夙に家學を受け 又大垣の野村藤陰に就きて經史を修む。

(鳳陽遺稿、文久新撰名家絕句、平安名家墓所一覽)

木蘇岐山

父大夢頌學の目あり。特に勤王の志厚く、小原鐵心等と俱に國事に奔走す。(第三章方外の諸家参照)岐山また膝下に在りて、研鑽倦まず。特に賦詩の絶妙なる、弱冠既に大沼枕山を嘆服せしむ。常に小野湖山、江馬天江、森春濤、同槐南等と詩酒徵逐し、聲名大に揚る。然れども性狷介、苟も俗と合はず。是を以て轆轤不遇、各地に飄蓬轉徙す。晚年大阪毎日新聞社長某の知遇を受け、同社に客員として詩壇を擔當し、また社員の爲に詩を講せり。

岐山學殖深遂、最も典故考證に精しく、自ら五千卷堂主人と號す。實に槐南歿後、高野竹隱と共に天下の雙壁と稱せらる。惜い哉、大正五年春來黃疸を患へ、醫療に手を盡し、も其効なく、同年七月二十八日午後五時心臟麻痺に陥り、遂に館を捐てぬ。年六十一。死に先つ二日、隣家山口氏に辭世の七絶を示せしが、結句に曰く、「假住人間六十年」と、騷壇凋落の際殊に痛惜すべし。山本柳塘の哭詩に曰く、

彩耀雲表鸞鳳翽。
眼底人物皆兒曹。
六十一年假住足。

氣壓元龍湖海豪。
筆底鬼神恣來往。
長留詩卷一風標高。

天成詩贈大如斗。
上下千載騷風騷。

堂堂藝苑揚旌旄。
李杜文章進光焰。

雄辯高談闡玄奧。
韓蘇著作翻海濤。

また以て一部の小傳に充つべし。著す所五千卷堂詩話、星巖集註、及び詩文稿若干卷あり。家に藏すと云ふ。

岐山初め森春濤等諸家に追隨して時流の詩を賦せしが、後翻然として自ら悟る所あり。古體は漢魏を規撫し、今體は盛唐を範として、目光中晚以下に落ちず。規律森嚴にして、一句一字備に淵源あり。卓として一代の巨匠を以て推さる。最も時流の才調嫵媚を惡みて目するに淫詩を以てし、詩に文に、大聲

疾呼、倒瀾を回して、大雅の正に復さんとせり。嘗て云ふ。

自三森響一唱淫詩。
歟。抑亦人為與焉。

無識之徒。爲其所染。
靡然成風。黃茅白草。

斥齒彌望。風雅淪胥。
詩教掃地。嗚呼天之將喪

詩教掃地。嗚呼天之將喪

以て其の志を知るべし。近時俗學漸く跡を歛めて、文壇其の面目を改めんとするもの、其の効亦偉ならずや。左に其の詞藻の一斑を示すべし。

失

題 (少作)

又是吳瓊低唱夕。

垂楊垂柳雨濛濛。

(鷗笑新詩)

不深水閣不多橋。

小醉易醒魂易銷。

又是吳瓊低唱夕。

垂楊垂柳雨濛濛。

風月揚中葦常主。

欲戀吳天一雁狂。

空教三流俗肆猖狂。

別裁三偽體一師工部。

剪落淫詩一學狄梁。

風月揚中葦常主。

蘇峽香濃勝。

平生夢想勞。

今年有事役。

夏五光風瀾。

買舟太田曉。

草木澄三新翠。

決瀆煙嵐流。

報道可見合。

可兒川與蘇峽。

盤石扼三其衝。

崩騰驚濤投。

輶雷浩呼洶。

勢欲簸三陵邱。

圓旋與方折。

昂首天神嶺。

松壁千仞高。

奇巖旋三厥右。

角逐紛迎來。

巨靈施三斤斧。

巽坎所三搜激。

嵌空無三寸膚。

神奇不可狀。

弔詭恣三雕鏤。

如三賈期三必售。

行行觀覽富。

如讀三南山詩。

南望犬山城。

空中現三長樓。

西對伊木崎。

湯湯水平漫。

崑崙天字遙。

漁歌遞相答。

白鷗沒還浮。

沙嶼相向出。

上有三崩黎廬。

謀生就三魚麥。

年年昏望憂。

無如三浮世狹。

憐渠苦三誅求。

刺刺訴不休。

雖云賦命薄。

勝力是自由。

布帆幸無恙。

清風灑客愁。

指點笠松驛。

樹抄國青旗。

叶音求

書淫

吟

往寓京日、槐南罵余書淫、國分青崖書狂、本田種竹書痴、蓬驅北越又南紀。

不成一事直至今。

依然實賦飯不足。

槐南罵我爲三書淫。

卅載佳話傳三詞林。

必購奇書一拱璧較。

恒教三山妻讀漆樹。

敢道兒孫復三真產。

蓋頭玉川數問屋。

嗜痴嗜炭病難除。

功名既爲識字性。

死後真榮竟何如。

陋巷六經樂實秋。

白頭屹屹勤著書。

時復思誤聊自誤。

竟賢生前一杯酒。

死後真榮竟何如。

陋巷六經樂實秋。

男兒豈是等閑休。

嗚呼題壁三千首。

竟賢生前一杯酒。

死後真榮竟何如。

陋巷六經樂實秋。

2 岐阜及其附近

明治の世に至るまで残存せる宿儒として、岐阜に林犀江及び加島七舟の兩氏あり。加納に三宅樞臺あり。日置江に青木東山あり。笠松に角田錦江あり。長良に小林華山あり。黒野に郷餘齋あり。各々私塾を開きて後進子弟を薰陶し、或は風雅を振作して、休明の氣を鼓吹せり。其の功洵に没すべからざるものあり、(犀江、樞臺、錦江、餘齋、東山の五氏に就きては、既に記述したれば茲には記さず)

加島七舟、名は一、字は重遠、通稱喜一郎、七舟は其の號、別に徇齋と號せり。岐阜朝屋町の人、其の先は織田家の老職賀島清左衛門にして、岐阜落城の際、一時難を阿波國に避けしが、幾もなくして岐阜に歸り、朝屋町に住せり。

七舟、天保八年を以て呱呱の聲を揚ぐ。天資靈俊、幼より才學衆に超へ、初の漢學を笠松の角田錦江に受け、和歌を尾張國津島町氷室長翁に、國典を名古屋の植松茂岳に學び、別に軍學を名古屋柳生流の名士

加島七舟

柳生六助に學べり。博聞強記、一度聞けば忘るゝ事なく、人皆其の偉才に驚嘆せりと云ふ。

既にして私塾を自宅に開きて(日本教育史資料には弘化二年開塾、慶應元年廢業と記せり。然れども弘化二年には九歳の幼年なれば此の事無きや明なり。蓋し開塾は文久前後ならんか)子弟を教授す。年壯に及び(慶應元年ならんか)擧げられて名古屋明倫堂の助教授となる。後明治三十年より約十年間愛知第一中學校の漢文教授となり、ついで第三師團工兵第三大隊の國語漢文囑託教授となり、銳意育英の事業に従ひ、後岐阜に歸り、又名古屋に赴き、相往復すること數次、終に岐阜朝屋町に隱棲し、晩年の專業として、皇漢學研究所を設け、専ら子弟の教育に努む。晩年脚疾に罹り、起居意の如くならず。後又心臟の痼疾に冒され、遂に大正五年十月二十六日黎明溘然眠るが如く白玉樓中の人となれり。享年八十歳。

七舟人となり高雅敦厚にして温乎たる風采を具へ、人をして自ら崇敬の念を生せしむ。其の學、博く經史百家に通じ、殊に詩經の研覈深く、林三益が左傳の大家たるに對し、詩經の大家を以て知られ、又能く詩を賦し、文を屬し、且敷島の道にも精しくして、詠草の逸品尠からず。學界の耆宿漸次凋謝せるの際、縣下屈指の國漢學者として推されしが、斯の文星今や亡し。惜しむべき哉。左に其の詞藻の一斑を示すべし。(日本教育史資料、同人集、及浪飛日報に據る)

老馬行

荒原日千里。

逐敵汗如油。

飢噓刃山雪。

渴食戶水流。

歸朝一時老。

伏軾夢悠悠。

勇士今何處。

霜風古驛秋。

竹窓圍棋

風絕竹梢新月升。

涼陰下子互相矜。

婆娑影落楸枰暗。

欲決三輪贏二更點燈。

天地自然道。

須知三涵養說。

樓連仙境翠微間。

曉

玉露玲瓏濕紫苔。

暮天無雲吟眸開。

爲君今宵睡吟骨。

今夜佳與人知否。

秋風連爾醒唐帝。

觀月

流行不滯留。

毫末更清明。

出岫閑雲往又還。

竹

綠陰如水曉煙開。

爽氣橫秋滿樓臺。

嬌娥應笑杯頻傾。

此心只有三明月。

嗟呼吾思古亦沈吟。

讀經觀萬物。

不有工夫未到。

朝暮曾使三人嘲笑。

朝暮曾使三人嘲笑。

翻覆回夢風吹影。

掌上忽動金波影。

御風逍遙遊三月窟。

聞說月宮攀香桂。

夢耶幻耶無處尋。

三才經同人集小林一耶氏寄小林華山傳

立志可傳由。

生來誤三生。

閑雲不似野人閑。

朝日滿簾鳴鳳來。

皎皎明月映杯來。

雙脚勃窣舞餘々。

紅粉翠環妝麗。

吟拋身世付三醉。

關外月傾夜色深。

舉杯先醉蒼空月。

彷彿吳剛斫桂姿。

一部未闕霓裳曲。

關外月傾夜色深。

3 中濃文壇の概観 (森春濤の寄寓と其の門下)

此を外にして、岐阜には、津田天游(名は發、字は子重、通稱千里、稻葉郡那加村の人、私塾鳳鳴塾を開く)横山文淵(名は幹、呂久、横山三川の子、私塾鳳鳴塾を開く)の諸氏あり。但現存の人なれば別に傳を立てず。

美濃詞壇を振作して百花綸爛の觀のらしめたるもの、前にしては江村北海、後にしては頼山陽及び梁川星巖の功に歸せざるべからず。維新の後斯道頗る衰頹したれども、風雅全く地に墜ちざるものは、森春濤諸子が卵翼の賜と謂ふべし、故に以下其の寄寓當時の概況を記して、門下諸子に及ばんとす。

森春濤、名は魯直、字は浩甫、春濤は其の號、尾州一の宮の人、家世々醫を業としたれども、春濤之を學ぶを欲せず。尾張の儒醫津益齋の門に入り、同門の大沼枕山と研鑽の功を積む。後梁川星巖の門に入り、更に詩法を研磨せり。安政の頃、名古屋に移り、徒を集めて教授す。門に入るもの百を以て數ふるに至る。文久の頃配國島清子(稻葉郡黒野村大字古市場の舊家國島徳三郎の叔母)を娶り、やがて男槐南(泰三郎)を擧ぐ。夫春濤は天下の詩人として盛名ある星巖の高弟なるに、妻も富樫廣蔭の門下として詠歌に巧なりしは、其の師星巖夫妻に相似たりと謂ふべし。

王政維新、百度更改して世態一變し、詩人の如きは無用の長物として顧みられず。僅に妻が明倫堂女教師として、又國文及び和歌の教授を以て、細き煙を立てしも、猶一家數口を糊する能はずして、妻の郷里なる國島家に寄食したるは明治四年なりき。偶々學制の頒布ありて、到る處に學校の設置あり。天下皆教育の必要を知ると雖、春濤夫妻の如きは其の器大にして、且風流韻事を本色とすれば、卑近なる小學教師たるに適せず。唯附近の漢詩嗜好の有志者十數名、就きて教を乞ふあるに過ぎざりき。翌々六年三月同志の周旋により、移りて岐阜上今町の木葉庵に僑居す。香魚水齋精廬即ち是なり。是の年朝廷改曆の擧あり。即ち新曆謠一卷を作る。岐阜に在るもの凡そ一年有半、岐阜雜詩一卷の著あり。當時春濤が詩人としての盛名は東西兩京に傳はり、西京に於ては江馬天江、賴支峰、谷鐵臣、神山鳳陽、山中信天、東京にありては大沼枕山、小野湖山、鱸松塘、河田甕江、巖谷古梅、日下部鳴鶴等と應酬頻繁なるも、燈臺下暗しの譬にて、岐阜は此の大詩人を容るゝ能はず。多少風流の嗜好ある縣令長谷部恕連(南村と號す、春濤舊門人)、參事小崎利準(我我陳人と號す)の如きは之を尊敬したるも、他の俗吏及び或る國學者

の如きは、此の無用の閑人を放逐するに非ざれば、岐阜の開明は望むべからずと爲したり。是に於て春濤も永住の見込無く、東京の知人より頻に移住を促し來るを機とし、明治七年秋、成美堂出版の岐阜雜詩一卷を置記念物として、遂に東京に移住するに至れり。岐阜雜詩の卷首に云ふ。

明治六年三月十四日。徙居^二岐阜^一。扁曰^三香魚水齋^一。東南對^二山^一。號^三九十九峰軒^一。北俯^二藍見川^一。又號^三三十六灣書樓^一。具原翁木曾路記。稱^二岐阜風水^一。曰^レ似^二平安城^一者不^レ誣也。作^二岐阜雜詩^一。

また其の跋に云ふ。

予寓^二岐阜^一。匝年四閱月。將^レ以^二本年九月十月之交^一移^レ寓^二東京^一。自謂。著^二雜詩一卷^一。繫^二蝶之夢影^一。留^二鴻之爪痕^一。而去矣。乃以^二六月二日^一起^レ稿。以^二廿八日^一就^レ緒。不^二二匝月^一。而得^二絕句二百零二首^一。挿^レ以下^二日來所^一口占唱和^一者三十八首。聊成^二次序^一。併得^二二百四十首^一。字組句硬。不^レ遑^二再改^一。勿卒付^二之割削^一。詩亦勿卒而成。杜撰或多。待^二他指摘^一。乃改焉耳。更有^二古律諸體百三十餘篇^一。而自^レ今至^二去之日^一。猶有^二三三四閱月^一。行當^レ又得^二詩若干首^一也。他日併錄。將^二副刻^一焉。鴻痕蝶影。庶幾其不^レ滅乎。明治七年六月大祓日。春濤魯直識。

左に其の二三を抄せんか

金 華 山
青○山○漢○漢○金○華○
割○據○當○年○徒○自○誇○
畢○章○嬌○家○多○武○略○
也○無○三○人○載○賣○油○筆○
長 峽
亂○山○掩○翠○峽○雲○符○
流○子○爭○隈○微○雨○餘○
斜○掠○三○細○澗○
落○花○風○裏○擲○香○魚○
香○魚○水○齋○精○麈○
若○爲○二○先○生○一○編○小○傳○
香○魚○水○齋○有○二○精○廬○
昔○痕○狼○籍○壁○中○書○
猶○是○春○泥○鴻○爪○餘○
當○時○春○濤○の○教○を○受○け○た○る○も○の○郷○掃○石○(現○存○)、高○橋○倭○南○、小○林○華○山○、(既○出○)片○野○南○陽○名○は○龍○藏○、(安○八○郡○大○藏○町○五○反○)郷○の○人○片○野○萬○右○衛○門○の○子○畫○を○山○本○梅○逸○に○學○ぶ○、明○治○十○五○年○八○月○癸○亥○四○十二○野○川○湘○東○(本○巢○郡○一○色○村○數○屋○の○人○名○は○任○、字○は○子○敏○、通○稱○杏○平○醫○を○業○と○し、遠○州○流○掃○花○宗○匠○た○り。大○正○六○年○病○歿○、年○八○十○)雄○山○魯○岳○(岐○阜○櫻○町○誓○願○寺○住○、名○は○瑞○倫○、字○は○望○之○、詳○空○と○稱○す、現○存○)連○雲○濤○(本○巢○郡○一○色○村○有○里○の○人○、長○福○寺○住○、名○は○順○獎○、大○正○八○年○六○月○二○日○歿○)等○の○諸○氏○あ○り。(岐○阜○雜○詩○、同○人○集○、岐○阜○日○々○新聞○)後○年○、雄○山○魯○岳○、津○田○天○游○の○二○氏○を○盟○主○と○せ○る○藍○水○同○聲○吟○社○の○創○設○あ○り。文○運○未○だ○幸○に○衰○え○ず。但○現○存○の○人○多○け○れ○ば○別○に○傳○を○立○て○ず。

門下諸子

三、北濃及東濃地方の文教

維新後、西濃地方にはなほ幾多の碩學者宿存して、文教の見るべきものありたるに反し、東濃及北濃地方には僅に八幡の入山鎌受(既出)、上有知の村瀬雪峽、久々利の木曾旭翁(既出)、神谷簡齋、水谷奥嶺(現存)、苗木の曾我祐申(既出)、等數氏あるの外、寥寥聞く所なく、學界轉に寂寞を極めたりき。

村瀬雪峽、名は颯、字は君尊、雪峽は其の號、通稱東作、武儀郡上有知(美濃町)の人、山陽門下の高尾村瀬藤城の姪にして、近世南畫の大家秋水の子なり。文政十年を以て生る。

幼にして穎悟學を好み、伯父藤城及び父秋水に就きて經史を受け、詩文を學ぶ。學程朱を宗とす。また畫を父秋水に學びて其の箕裘を襲げり。其の風韻は父に及ばざるも、畫技の巧は寧ろ之に過ぐ。後江戸に出で、佐藤一齋の門に遊び、又京師及び浪華に赴きて、牧戀齋、後藤松陰、廣瀬旭莊等の門を叩き學成りて郷に歸り、伯父藤城を助けて門下生の教授に任せり。

嘉永五年十一月、官、藤城一家の行事を奇特とし、特に雪峽に對し苗字帶刀を許さる。(父秋水は前年十一月同じく苗字帶刀を許さる)辭令書に云ふ。

村瀬雪峽

澗州武儀郡上有知村

村瀬平次郎(藤城)

代 村瀬太六(秋水)

去々年来窮民に多分の施物いたし、殊に自他村々之内、必至難澁之者共飢渴爲凌方等萬端立入、且世話、其外居村并引受村々共成立筋深切に取扱、餘力を以學業相勵、宿門人を初、隨身之者共取立方行、屆候趣相聞、奇特之事に付、格別之譯を以、孫東作(雪峽)身分に付、苗字帶刀差免候。

十一月

蓋伯父藤城、夙に私塾を開きて教化に力を用ひ、且郷正として治績あり。嘉永三四年饑饉の際の如き、自ら錢穀を發して窮民を賑恤する等、異行美躅枚擧に違あらず。兄弟伯姪同じく榮典を蒙れるもの故なきに非ず。一門の光榮思ふべき也。

是より先嘉永四年辛亥七月伯父藤城及父秋水に従ひて京に入り、梁川星巖を初め當時の諸名家と詩酒徵逐す。當時著名の文人、貫名家屋、宮原節庵、家長韜庵、頼支峰、桑原水雲等の如き、皆其の知友にして、郵筒往復互に詩文を研鑽せり。性磊落にして出遊を好み、後年また頼三樹の徒と交り、勤王の議を唱へき。

嘉永六年癸丑九月伯父藤城の歿するや、雪峽繼ぎて舊門生を薰陶す。門に入るもの日に多く、郡上、岩村、加納、彦根、大垣等諸藩子弟の笈を負ひ、來りて入門寄宿するもの亦少からず。郡上侯特に厚祿を以て聘せんとし、懇請再度に及びしが、故を以て之を辭し、子弟教授の餘暇を以て、屢々郡上に赴き、藩中並に領内子弟に對し懇篤に教授せり。維新の後も尙帷を垂れて徒に授け、又出で、名古屋に寓せしが、明治十二年己卯八月五日病を以て歿せり。享年五十三。以安寺山圓通寺に葬る。諡して無我軒雪峽

宗質居士といふ。配神戶氏(大山町神戶昌吾の女)一男(藍水)二女(小菫、智松)を擧げて歿す。後配林氏(太田町林五郎の姉)一男(東山)をあぐ。男藍水家を嗣ぐ。左に其の詞藻の一斑を示さむ。

過二 關 原一

江雲瀟瀟望茫茫。成龍驤是此場。

當日何邊聞一响。西風一路稻花香。

山田子龍親梅案詩。因賦爲贈

一枕東風夢方斷。半庭香雪上梅花。

讀書窗外影橫斜。

書撫三南宮一作三乘。書依三北苑一學三披麻。

冬日閑居雜詠

滿天風雪自斜斜。殘歲眞如三赴。野茶。坐有三吟僧。野茶。誰識吾家冬不淺。

閑養二微病一事三筆耕一

埋三頭亂味一坐三三更一

引兵遂戰蔡州城。

史書讀了思三疑義一

引兵遂戰蔡州城。

一穗寒燈萬古情。

村瀬藍水、名は緒、字は形弓、藍水は其の號、通稱岸太郎、雪峽の長男にして、秋水の孫なり。文久元年十二月十八日を以て生る。

少より箕裘の業を繼ぎ、儒學及び書法を修め、佐藤牧山及び根本通明の門に遊ぶ。弱冠清國に航し、蘇州の鴻儒戴揚柏に就きて學び、韓渥泉及び俞曲園の囑を受けて書を作る。名既に彼國に高し。四年にして業成りて歸り、名聲日に偏し。帷を東京に下さんと欲して未だ果さず。明治二十五年二月七日病に罹りて逝く。享年僅に三十二、聞くもの痛惜せざるはなし。圓通寺塋域に葬る。諡して吳雲軒藍水宗緒居士といふ。翌二十六年十二月弟東山また逝く。よりに養嗣鐘作を迎へしが、三十九年また病歿せしかば、更に當代一、三氏を迎へて嗣となせり。

村瀬藍水

元年十二月十八日を以て生る。

少より箕裘の業を繼ぎ、儒學及び書法を修め、佐藤牧山及び根本通明の門に遊ぶ。弱冠清國に航し、蘇州の鴻儒戴揚柏に就きて學び、韓渥泉及び俞曲園の囑を受けて書を作る。名既に彼國に高し。四年にして業成りて歸り、名聲日に偏し。帷を東京に下さんと欲して未だ果さず。明治二十五年二月七日病に罹りて逝く。享年僅に三十二、聞くもの痛惜せざるはなし。圓通寺塋域に葬る。諡して吳雲軒藍水宗緒居士といふ。翌二十六年十二月弟東山また逝く。よりに養嗣鐘作を迎へしが、三十九年また病歿せしかば、更に當代一、三氏を迎へて嗣となせり。

村瀬藍水

元年十二月十八日を以て生る。

少より箕裘の業を繼ぎ、儒學及び書法を修め、佐藤牧山及び根本通明の門に遊ぶ。弱冠清國に航し、蘇州の鴻儒戴揚柏に就きて學び、韓渥泉及び俞曲園の囑を受けて書を作る。名既に彼國に高し。四年にして業成りて歸り、名聲日に偏し。帷を東京に下さんと欲して未だ果さず。明治二十五年二月七日病に罹りて逝く。享年僅に三十二、聞くもの痛惜せざるはなし。圓通寺塋域に葬る。諡して吳雲軒藍水宗緒居士といふ。翌二十六年十二月弟東山また逝く。よりに養嗣鐘作を迎へしが、三十九年また病歿せしかば、更に當代一、三氏を迎へて嗣となせり。

村瀬藍水

元年十二月十八日を以て生る。

少より箕裘の業を繼ぎ、儒學及び書法を修め、佐藤牧山及び根本通明の門に遊ぶ。弱冠清國に航し、蘇州の鴻儒戴揚柏に就きて學び、韓渥泉及び俞曲園の囑を受けて書を作る。名既に彼國に高し。四年にして業成りて歸り、名聲日に偏し。帷を東京に下さんと欲して未だ果さず。明治二十五年二月七日病に罹りて逝く。享年僅に三十二、聞くもの痛惜せざるはなし。圓通寺塋域に葬る。諡して吳雲軒藍水宗緒居士といふ。翌二十六年十二月弟東山また逝く。よりに養嗣鐘作を迎へしが、三十九年また病歿せしかば、更に當代一、三氏を迎へて嗣となせり。

村瀬藍水

元年十二月十八日を以て生る。

少より箕裘の業を繼ぎ、儒學及び書法を修め、佐藤牧山及び根本通明の門に遊ぶ。弱冠清國に航し、蘇州の鴻儒戴揚柏に就きて學び、韓渥泉及び俞曲園の囑を受けて書を作る。名既に彼國に高し。四年にして業成りて歸り、名聲日に偏し。帷を東京に下さんと欲して未だ果さず。明治二十五年二月七日病に罹りて逝く。享年僅に三十二、聞くもの痛惜せざるはなし。圓通寺塋域に葬る。諡して吳雲軒藍水宗緒居士といふ。翌二十六年十二月弟東山また逝く。よりに養嗣鐘作を迎へしが、三十九年また病歿せしかば、更に當代一、三氏を迎へて嗣となせり。

(村瀬白石撰墓碑銘、中京畫談)

神谷簡齋、名は道一、字は子貫、簡齋は其の號、別に松逕、泳山及び知己、青山窩の號あり。文政六年正月廿七日、可兒郡久々利村に生る。父名は道孝、母は岡部氏、系、天兒屋根命に出づ。貞治年間高正なる者あり。石見守と稱し、伊州神谷城に居る、因て氏とす。七世の祖兼重、始めて來つて久々利領主千村氏に仕へ、世々給人に班す。千村氏維新後、本姓木曾に復す。もと徳川氏の旗下にして、尾藩に附屬し、世々久々利に住す。家臣百數十人、隠として諸侯の如し。

簡齋生れて穎悟、領主仲泰(本傳第三章與隆期參照)甚だ之を愛し、自ら句讀及び習字を授く。稍長するに及び命じて名古屋に遊學せしむ。時に丹羽盤桓翁書を善くして一藩を教授す、及門の者三千人、簡齋即ち贊を執りて書法を問ひ、併せて文學を修む。時に天保九年八月(年十六歲)なり。簡齋刻苦勉勵、未だ幾ならずして其の高足となる。同十二年盤桓翁病に罹り、自ら起たざるを知り、退筆塚を七寺域内に設け、碑を樹て、其の閱歷を記す。門人澤田師厚をして文を撰せしめ、簡齋及び山田脩、水谷宏、山崎良顯をして之を書せしむ。既にして成る。翁之を視て善しと稱す。三月遂に歿す。特に簡齋に遺囑して嗣子を佐け箕裘を繼がしむ。乃ち爲に留ること一年、而して後歸る。

此の時に當り、領主仲泰、大に文武を修め、家臣子弟を獎勵す。簡齋文教を掌り、兼て劍法を修め、印可を受くるに至る。是より先簡齋小納戸役たり。嘉永四年十月勘定奉行に進み、側用人を兼ねぬ。六年父道孝老す。因て家を承く。此の年仲泰亦老し、嗣君立つ。七年擢でられて家老となる。此の時に當り我邦外交始めて開け、列藩武備を修む。簡齋嗣君を輔けて、益々文武を勵まし、且大に銃砲を鑄、甲兵を蓄ふ。元治元年十二月水藩浪士東山道を西上す。尾藩急使を派し來りて出兵を囑す。使者未だ還らず。

兵已に發行す。尾藩其の神速に驚く。慶應三年幕府政權を朝廷に還すや、諸士或は去就に惑ふ。簡齋夙に尊皇説を持し以て士心を定む。明治元年四月、領主兵を出して官軍に従ひ、屢々北越に戦ふ。簡齋代り攝し、賊平ぎて九月遂に旋る。此の時木曾氏尾藩と爭議あり、遂に之を朝廷に訴ふ。簡齋其の衝に當り屢々東京に往來す。其の間苦を嘗め難を履み、或は刺客の狙ふ所となり、而も少しも屈せず。三年九月朝廷遂に木曾氏をして笠松縣(後岐阜縣に改む)に貫せしむ。六年簡齋南宮神社禰宜に任ず。八年岐阜縣出仕に補せられ、史誌編輯を掌る。十二年始めて郡衙を置く。二月擢でられて可兒郡長に拜し、後惠那及び大野、益田、吉城郡長に轉ず。十八年六月老を以て致仕す。簡齋人と爲り謹嚴端直、質慤勤儉、前に木曾氏の家老たる十有八年、後郡長となること七年、常に勤儉を以て下を率ひ、學を獎まし、業を勸め、其の績算ふるに勝ふべからず。其の致仕するに及び、官厚く之を賞賜せり。

簡齋、學程朱を奉じ、而して左傳に達し。又國典に通じ、最も書を善くす。詩文亦誦すべし。名聲噴々、遠邇來り學ぶもの前後數十百人、尾州柳川春三、岩邑中島忠誨の如き、或は文學を以て、或は書法を以て各々一家を成せり。況や義烈西山尙義の如きあり。風雅深賞房次の如きあるをや。其他一科一藝に通ずるもの枚擧に遑あらず。水谷奥嶺の如き、亦其の薰陶する所たり。名士亦多く來り交る。岩邑の丹羽瀨樞、攝津の都賀強、女傑松尾多勢、志士藤川三溪の如き是なり。三溪文を好む。維新の初、東京に相遇ひ、席上詩を賦す。簡齋立に之に和して三疊韻に至る。三溪大に其の警敏に服せりと云ふ。蓋し其の寡言謙退、三溪初め其の長者たるを知らざりし也。

簡齋夙に修史の志あり、致仕の後關原合戰圖志を著す。辛苦七星霜、汎く群籍を搜し、屢々實地を討ね、

引據明確、考証精核、曲に顛末を盡す。而して其の戦狀を圖するや、邦人未だ曾て試みざるの例を創む。蓋し古來關原の戦を記するもの、皆徳川氏の盛時に成り、毎に東を揚げ西を抑ふ。簡齋嘗て之を疾み、直筆忌憚なく、議論風生、斷案鐵の如く、地下の老好をして膽を寒からしむ。既に成る。之を、天皇、皇后、皇太后、皇太子に獻せり。凡そ簡齋著書多しと雖も、此の編を最となす。遠近相傳へ争て之を購ひ、名益々顯れ、詩文及び書を乞ふもの、日に多きを加へ、緋素常に室に滿つ。然れども簡齋性恬澹、自ら誇らず。居を岐阜に移し、扁して知己青山窩と曰ひ、左圖右史、金華の頂に採り、藍川の涇に釣し、從容自適、以て餘年を樂む。君子人と謂ふべき也。配荒川氏亦婦行あり、伉儷の間敬愛賓客の如く、未だ曾て忿怒の聲を聞かず。六男あり、長道、明家を嗣ぐ、嘗て岐阜縣警部たり。次由、道臺灣總督府に官す。次惟道、道幸、並に天す、次桂五、季凱、藏皆官に在り。爾餘諸孫有用の材多し。

明治三十六年辛卯正月、門人親族相謀りて、八秩の壽筵を萬松館に開き、賀章を江湖に募る。四方詩歌書畫を贈りて壽を賀するもの無慮七百餘、編して一卷となし、題して「ことほき」といふ。又以て其の高風を想見すべし。

- 春山 如笑
- 萬樹櫻花開漫春
- 霞籠三峰嘯一淡粧新
- 青山萬裏捲簾望
- 亦似青山笑向人
- 自適道通名教間
- 人情翻覆又何關
- 客居雖陋多風趣
- 庭樹缺邊看碧山
- 赴二任 飛州
- 讀得人間樂與憂
- 猶有三青山舊因在
- 又移三吟杖一入三飛州
- 經三過世路一農春秋

不二山

八榮美哲世所尊。千秋白雪照乾坤。忽疑咫尺通三天。夜未三更看朝暾。

明治三十七年九月十一日病歿す。壽八十二。(ことほき、小谷與嶺撰簡齋先生傳)

水谷與嶺(名は弓夫、字は金箭、別號栢里、讀仙書樓、七星研齋、友梅軒、嘉永元年七月、久々利に生る、今、名古屋南武平町に住す)に就きては別に傳を立てず。

結語

回顧すれば、余が始めて筆を此の文教史要に染め、岐阜縣教育誌上に寄稿せるは、大正四年の十月にして、爾後日月を閲する殆んど滿三箇年、回を重ねる三十餘回に及べり。其の間大方の諸賢が多大の同情を寄せられ、貴重なる幾多の資料を寄贈し、諸種の援助を與へられたるは、洵に感謝に堪へざるなり。此の間或は博く古今の群籍を涉獵し、或は屢々實地に遺跡を探討して、苦心焦慮、隠れたる事蹟の闡明に努めたりと雖も、如何せん文献足らず。加之余輩の淺學非才を以てして、疎漏杜撰の點多く、諸賢の期待に負きし所少からざるは、余の深く遺憾とする所なり。

思ふに「長者三代無し、學者二代無し」の譬に漏れず。德行文章一世に秀でたる我が郷の先儒にして、子孫の零落せる爲め、一片の苔石すら殘存せざるものあり。或は前賢が畢生の心血を注ぎたる著書若しくは遺稿にして、殆ど天下に其の跡を滅せるものあり。聞幽顯微の事豈容易ならんや。余が此の編もとより我が郷文教史の一斑に過ぎず。研究は纔に一階梯を得たるのみ。余は、各地方教育家諸君が更に更に層一層の研究を積まれ、世に埋れたる先哲の事蹟を廣く世上に紹介し、以て斯道に貢献せられんこと

校正を了るに臨みて

回顧すれば、本書が三浦百拙氏初め岡安、浅野諸氏の好意により、單行本として出版せらるゝ協議の成立せしは、一昨年中の事にして、それより増補訂正を加へて、原稿を印刷所へ交附せしは、客年二月の半なりき。然るに一二ヶ月を経て、或る事情により、印刷所を變更するの止むなきに至り、之に加ふるに印刷物の輻輳と職工の不足とにより、容易に印刷を見るに至らず。往年八月の末にいたりて漸く印刷に著手せしが、前陳の事情の外に、普通に使用せざる文字多き爲め、校正印刷に意外の長日月を要し、年末に逼りて辛うじて本文の印刷を了り、越えて本年に入り、年表及索引の印刷を終りて、茲に漸く発行を見んとするに至れり。思へば此の間殆んど一年有餘の日子を費した無情なり。

終に臨み、戸田伯爵閣下より題字を賜はり、鹿子木本縣知事閣下及び吉村前大垣中學校長より序文を賜はりたるは余の最も光榮とする所にして、特に記して深く其の御厚情を感謝する所なり。

大正九年一月

伊藤信 謹識
 大正九年一月 金屋信大 謹識
 伊藤信 謹識

大正九年二月十四日印刷
 大正九年二月十七日發行

定價金壹圓貳拾錢

著 者 伊 藤 信

發 行 者 三 浦 源 助

岐阜市多賀町三〇九番戸

發 行 者 淺 野 榮 次 郎

同 市 泉 町 七 番 地

發 行 者 岡 安 竹 次 郎

大垣市郭町百五十三番戸

印 刷 人 河 田 貞 次 郎

西濃印刷株式會社代表者

印 刷 所 西 濃 印 刷 株 式 會 社

大垣市郭町百五十三番戸

不 許 復 製

11
327

終

